Training

国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2019

育成×手話×芸術プロジェクト 報告書

Sign Language

Arts

育成 手話 芸術

Training / Sign language / Art

目次

はじめに…… 3
年間スケジュール…… 4

視察報告 5

ろう国際芸術祭の開催に向けたフェスティバル Clin d'Oeil（クランドイユ）の視察 …… 6
Festival Clin d'Oeil について …… 7
Clin d'Oeil における演劇（江副悟史）…… 9
ろう者の多層性としてのクランドイユ（木下知威）…… 11
Festival Clin d'Oeil, it is city of Deaf. ろう者の街、クランドイユ（牧原依里）…… 13
Festival Clin d'Oeil 創設者デビッド・デ・ケイザーへのインタビュー …… 15
クランドイユ芸術祭同行記（小池紀子）…… 18
ゲスト視察メンバーの感想（小野寺修二、藤田桃子、荒木夏実）…… 21

演劇部門 23

演劇部門　全体概要…… 24
手話で創る脚本教室…… 25
手話による演技メソッド検証のためのワークショップ…… 27
身体表現を生かしたムーブメントワークショップ…… 29
作品制作ワークショップ…… 30

美術部門 32

美術部門　全体概要…… 33
第 1 回　アートを開く…… 34
第 2 回　アートを体験する …… 36
スペシャル回　イギリスのミュージアムにおける手話による鑑賞プログラム…… 39
第 3 回　アートと身体 …… 42
第 4 回　感覚の境界を超える …… 45
第 5 回　アートとマイノリティ …… 48
アートを通して考える：ろう者と聴者が集う「場」のために（荒木夏実）…… 51

映画部門 53

映画部門　全体概要…… 54
牧原依里監督作品『田中家（仮）』…… 55
今井ミカ監督作品『お葬式！』…… 56

［総括］2019年度の活動を振り返って（小池紀子）…… 57

育成 手話 芸術
Training / Sign language / Art

はじめに

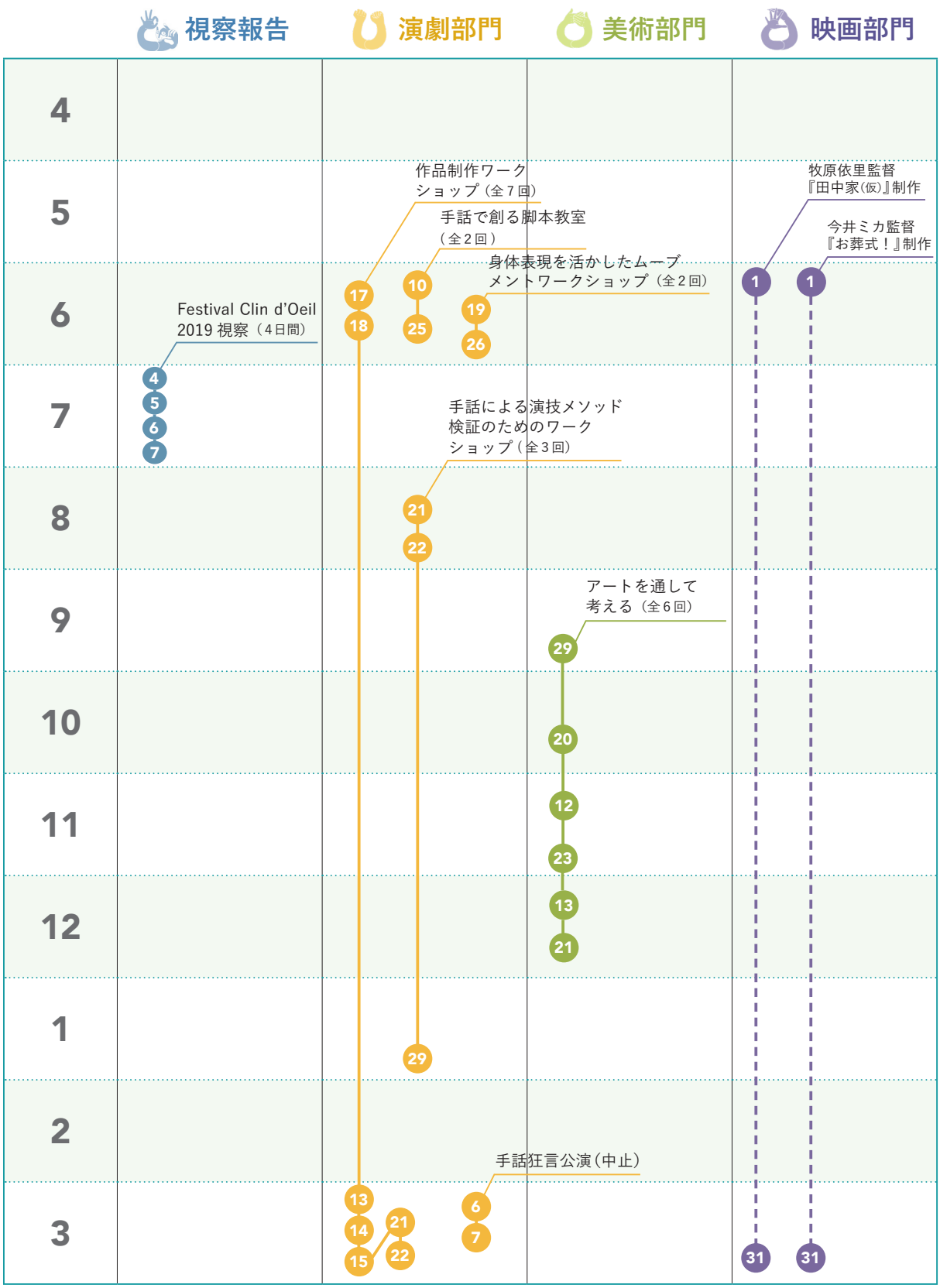
この報告書は、文化庁が実施する「令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」の採択事業のひとつとして、芸術活動に携わるろう者たちが中心となり、トット基金を母体として行った１年間の活動の記録です。近い将来、ろう者を主体とした国際芸術祭を創設したいという共通した目標のもと、演劇・美術・映画各分野で実績のあるろう者のリーダーたちが手を携え、ろう者の文化に深い理解と関心を持つそれぞれの分野の第一人者とともに、さまざまなワークショップ、作品制作、海外の芸術祭の視察などを実施しました。

表現力豊かな手話の魅力は、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を彩る文化プログラムのさまざまなシーンで、ますます注目を集めています。言語としてだけでなく、その背景にある「ろう文化」から生み出される手話の活力は、「新しいもの」を創造するための宝庫としてアーティストたちを惹きつけ、この事業においてもいくつかのコラボレーションが進行しています。

芸術活動を通して、個性を認め合い、尊重し合って「共通言語」を探していくことは、共生社会を実現するための一番の近道なのかもしれません。この事業報告をご覧いただき、そんなことも考えつつ、ひとりでも多くの方に手話の魅力を知っていただけたら幸いです。

育成 手話 芸術
Training / Sign language / Art

年間スケジュール



育成×手話×芸術プロジェクト

視察報告

＜視察報告のロゴマークについて＞

ウインクをしている Festival Clin d'Oeilの公式ロゴ（P6 参照）と、日本手話の「見る」を組み合わせて表したものです（ロゴデザイン：管野奈津美）

※ロゴの改変については Festival Clin d'Oeil の許諾を得ています

VISIT

ろう国際芸術祭の開催に向けたフェスティバル Clin d'Oeil（クランドイユ）の視察 Overview

目的

将来、日本におけるろう国際芸術祭の開催を見据え、資金調達や組織・体制の参考とするため、本事業がモデルケースとするFestival Clin d'Oeil（仏・ランス市、CinéSourds共催）の視察を行った。合わせて、芸術祭での招聘作品の選定につなげるとともに国際間の協力関係を形成することを目的とした。

日程

2019年7月4日～7月7日（4日間）

視察メンバー

視察は、「演劇」「美術」「映画」の各部門に精通するろう者のメンバーを中心に行った。また、各国のろう者の作品や活動の視察のため、ろう者との共同制作等を予定している演出家等もゲスト視察メンバー（★）に加え、視察団を形成した。

[演劇部門]

江副悟史（日本ろう者劇団代表）
小野寺修二（演出家 / カンパニーデラシネラ主宰）★
藤田桃子（パフォーマー / カンパニーデラシネラメンバー）★

[美術部門]

荒木夏実（東京藝術大学美術学部准教授）★
木下知威（日本社会福祉事業大学非常勤講師）

[映画部門]

牧原依里（映画作家 / 東京国際ろう映画祭代表）

[日本手話 / 音声日本語通訳]

和田夏実（インタープリター / 手話通訳士）

[制作 / 英仏音声通訳]

小池紀子（トット基金事務局長）

Festival Clin d'Oeil 公式ロゴマークについて

Festivalの名称である「Clin d'Oeil」はフランス語で「ウインク」という意味です。
そのフランス手話の動きが表現されています。

VISIT

Festival Clin d'Oeil について Program

Festival Clin d'Oeil（クランドイユ芸術祭）は、2003年にCinéSourds創設者デビッド・デ・ケイザーを中心に設立され、2年ごとにフランスのランス市で開催されているヨーロッパ最大のろう芸術祭である。「手話によるアーティストの育成と表現を守る」ことを目的とし、演劇や映画など芸術全てに手話を導入することを目指している。

2003年の第1回は約400人、第5回は6千人以上が集まる。2013年の10周年では、1万2千人以上、275人のアーティストを迎え、2019年は1万6千人以上の来場者数を記録するなど、世界中から注目を集めている。

フェティバル概要

芸術祭名：Festival Clin d'Oeil 2019 (9th)
ジャンル：演劇、映画、音楽、美術、展示会
会場：44 chaussée Bocquaine 51100 REIMS, France（仏ランス市 / パリ東駅から最寄りのランス駅までSNCFで約45分）
会期：2019年7月4日（木）ー7月7日（日）
入場者数：16,241人（累計）
ゲスト国：カナダ（2007ロシア・2009オーストリア・2011アメリカ・2013日本・2015メキシコ・2017ブラジル）
ディレクター：デビッド・デ・ケイザー David de Keyzer
主催：CinéSourds
公式ウェブサイト：clin-doeil.eu

開場時間

	Comédie（演劇・大劇場）	Saint-Ex（映画・劇場）	Village（展示会・音楽・屋台など※）
7月4日	8：00ー22：00	10：15ー19：00	9：30ー25：00
7月5日	9：00ー20：00	10：15ー19：45	10：00ー27：00
7月6日	9：00ー20：00	10：15ー19：45	10：00ー27：00
7月7日	10：00ー16：00	10：15ー16：00	10：00ー27：00

※他に、ゲームランド・コンファレンス・バー・ダンスフロア・ストリート演劇・キッズコーナー・コンサートステージ・エキスポなど

チケット情報

	PASS Festival 4日間	PASS Village Pack 4日間	PASS Village 4日間	PASS Village 1日間	Deaf Party 1日間
一般	180ユーロ	140ユーロ	90ユーロ	35ユーロ	30ユーロ
18歳以下 65歳以上	165ユーロ	130ユーロ	80ユーロ	30ユーロ	30ユーロ
12歳以下			無料	無料	
備考	・全てのプログラムに適用	・演劇は2公演まで ・映画適用外	・演劇適用外 ・映画適用外	・演劇適用外 ・映画適用外	・Deaf Party以外は適用外

プログラム（演劇・映画）

（※公式プログラム記載順）

演劇

作品名	国名	上演時間	制作
The Black Drum	カナダ	80 分	Canadian Cultural Society of the Deaf
W&M	フランス	60 分	Compagnie ON OFF
Monologue du vagin	フィンランド	80 分	TEATTERI TOTTI
Crying Hands	ノルウェー	90 分	Teater Manu
Home	スウェーデン	75 分	Riksteaterns – Tyst Teater
Magic Morgan	アメリカ	45 分	MAGIC MORGAN
Off Kilter	イギリス	60 分	Raw Material Arts

映画

作品名	国名	監督
BARRIER	イギリス	William Horsefield and Simon Ash
A DATE WITHOUT BARRIER	オーストリア	Christoph Kopal
AVA	イギリス	William Grint
I BELIEVE	イギリス	Bim Ajadi
I SEE YOU SAY	オーストラリア	Ramas McRae
LA LLAVE DE LA VENGENZA	スペイン	Javier Guisado
THE PASTMAN	アメリカ	Charlie Ainsworth & Mj Kielbus
TRIP TO MANIAVA	ウクライナ	Ruslan Rubanov
BOMBON	スペイン	Laura diaz Gonzalez
THE AWAKENING	ルーマニア	Remus Ilisie
HER BED	ルーマニア	Remus Ilisie
SILENT BRAINWASH	ドイツ	Dominik Nimar
MONSIEUR MICHEL	フランス	Julien Bourges
ALEXANDRE	フランス	Gael Bernard
THIS IS ED	アメリカ	Bob Hiltermann
ERNESTO	スペイン	Edgar Murillo
SAUVEZ NOS AMES	カナダ	Sylvain Gelinas
HEART WILL TELL	ウクライナ	Yurii Horianskyi
PARE	スペイン	Ruiz Freijo
DANGEROUS MEMORIES	スペイン	Berta Frigola & Edgar Murillo
FURIOUS HANDS	ブラジル	Robert Giuliano
CRY THE HEART	ウクライナ	Yurii Horianskyi
THE BOY WHO CRIED THE WOLF	アメリカ	Troy Kotsur
HOPE	ドイツ	Christopher Buhr
ROUTINE	アメリカ	Jon Savage
THE GINGERBREAD	イギリス	Paul Miller
Bad Girl	チェコ	Tamara Zudorova
NOIR ET BLANC	フランス	Amandine Soares Ferrao, Luka Jouanneau, Maëva Tixier, Océane Tixier
UNE PETITE FILLE	フランス	Lenny Hoarau, Paco Loeul, Roxane Hachani, Kenzo Loeul
Femmes sourdes, dites moi…	カナダ	de Marie-Andrée Boivin
FLOATING SAUNA	スウェーデン	de Erik Erkval
Sunderland Deaf Society's 40	イギリス	de Simon Herdman
Lastovke letajo nizko	スロバキア共和国	de Čater Tadej

※その他、ストリート演劇で 11 ヶ国 16 団体出演、ワークショップではデジタルアート・ペイティング・クッキングなどが展開、ショーでは 7 ヶ国 14 団体出演、デフパーティー（ダンスパーティー）では 7 ヶ国 7 団体出演。

VISIT

Clin d'Oeilにおける演劇

Report

Reporter:

江副 悟史　Satoshi Ezoe

日本ろう者劇団代表。東京都出身。日本ろう者劇団に入団後、手話狂言や創作視覚演劇公演などに出演。2010年3月までNHK『こども手話ウイークリー』のキャスターを務める。映画『獄に咲く花』で杉敏三郎役を演じる。3.11震災後にネット手話ニュース「DNN」を立ち上げる（現在休止中）。2017年より日本ろう者劇団の劇団代表を務める傍ら俳優、手話指導、キャスターなど幅広く活動中。

2019年7月4〜7日にフランス共和国マルヌ県にあるランス市にて、世界規模のろう者芸術祭「Clin d'Oeil」（第9回）が開催された。私自身も第7回（2015年）に「殺陣」のパフォーマンスを披露した。その年は、何十年ぶりと40度超えの暑い日が続いたため、多くの出演者は室内に避難し、披露や観劇に専念していた。今回は天気も良く、気温も程よく、外で外国の友人と色々情報交換したり、雑談したり、とても素晴らしい日々を過ごせた。

フランス・ヨーロッパにおける演劇について

欧米のろう演劇は1967年にアメリカの「National Theatre of the Deaf（NTD）/ アメリカろう者劇団」を筆頭に、各国にろう者演劇団体を多く設立した。フランスは1977年に「International Visual Theatre（IVT/ フランスろう者劇団）」を設立。現在でもパリにて劇場を運営しながらろう者を対象にした芸術を普及する活動を行っており、その知名度は世界のろう者劇団の中でも上位に入る。また2018年10月に、南西部にあるオート＝ガロンヌ県トゥールーズ郡にトゥールーズ＝ジャン・ジョレス大学（Université Toulouse - Jean Jaurès）でろう者・聴者問わず、舞台や映像などの手話表現者として2年間のカリキュラムで演劇表現、身体表現、演劇の運営方法などを学ぶコースが開設された。さらに聴者の演劇においてもろう者にも楽しんでもらえる手段として、セリフを文字化（字幕）や手話化（手話弁士）する活動も多く展開されている。ろう者の間でも芸術に対する意識の高さがうかがえることから、フランスがいかに芸術に力を入れているかが分かる。

Clin d'Oeil の演劇

「Clin d'Oeil」のメイン舞台演劇は7演目。サブ舞台演劇が9演目。ストリート演劇が15演目。開催するにあたって必ずゲスト国として1ヶ国招待される。2013年に社会福祉法人トット基金日本ろう者劇団も招待され、手話狂言を上演した。

『The Black Drum』

今回、カナダのろう者文化センターによる手話ミュージカル演劇『The Black Drum』が上演された。ろう者のAdam Pottle氏が脚本、演出はろう者のMira Zuckermann氏。妻の死に取り乱した女性を中心に物語を展開した民族的で幻想的な要素を備えた演劇だ。女性が持つ二つの美しいタトゥー「蝶」と「ブルドック」が光ると、異世界に飛ばされることから話が始まる。タトゥーから抜け出した「蝶」と「ブルドック」はガイド役として一緒に冒険するが、悪の大臣が支配する暗黒の力が彼女らの行く先を阻み…音のない世界で一致団結して生まれる、手話による美しい音楽で悪と戦う物語だ。演劇だけではなく、ダンス、音楽、モーションキャプチャプロジェクションも取り入れており、終始楽しんで観劇できた。また、音楽を単に取り入れた演出ではなく、見事に手話とミュージカルが融合された演劇だった。これまでろう者のミュージカル演劇を観てきたが、聴者に合わせたものが多く、ろう者である自分自身にとっては面白くなかった。しかし、この『The Black Drum』はパンフレットに「手話入り音楽」とあるように、ミュージカ

ルであっても聴者向けの音楽ではなく、ろう者向けに作られた音楽で、多くの観客を大いに喜ばせるものだった。

続いてノルウェーのTeater Manuによる『Crying Hands』。ドイツのナチス時代によるろう者と聴者の女性の「弱者」に焦点をあてた物語を構成。第二次世界大戦の歴史を調査、またナチス時代を経験したろう者数名にインタビューし、真実に基づいて作られた。これまでろう者とナチスの演劇は数多く上演されているが、今回の演劇はとても衝撃的なものであった。Teater Manuが「ドキュドラマ［ドキュメンタリーを基に作られるドラマ（演劇）］」というカテゴリーに挑戦した作品の一つでもある。2人のろう者による手話語りと、1人のろう者による時代背景のナレーションで構成され、ろう者男性と聴者女性の2人を中心に物語が展開していく。男性はナチスが挙げる「完璧なる世界」に喜び、ろう者の生活も完璧になれると信じ、ナチス活動をするも、ナチスの障害者排除によって囚われの身に。女性は医師としてナチスの実験などに関わり幹部までのぼりつめるが、祖母がユダヤ人であったと発覚し、突然収容所へ。男性は収容所近くで故障したナチス幹部のオートバイを直したことから気に入られ、特例で収容施設の管理者として活躍する。しかし聞こえないがためにユダヤ人たちの叫びなどを全く知らされない。最終的にホロコーストの実態を知ってしまい、苦しんでいく人生を歩む。他方、女性はホロコーストで過去に自分が実験し、開発した薬を自分に試されるという苦しみで暮らすも生き延びて今もなお生きるという人生。それぞれの物語から、過去の産物として終結させない、現在も通じる「どう生きるか」という普遍的な問いを突き付けられた観客は、彼らに沢山の拍手を送った。

Cryung Hands のキャストとの記念撮影

他に1人芝居によるグループのVisual Vernacular（手話によるショート演劇/サインマイム）や身体表現によるイギリスろう者の『Off Kilter』、性を扱った演劇やマジック、様々な演劇ジャンルを楽しめることができた。全体を通して、以前のろう演劇は聴者向けに“お涙ちょうだい”の演劇、またろう者をテーマにした演劇が多く見受けられたが、近年はそうではなく、一般的な演劇を披露する傾向に変わりつつある印象を受けた。日本ろう者劇団も創立当初から今でも変わらず「ろう者をテーマにした演劇」は上演されていない。今後のろう演劇の位置付けが大きく変わるだろうと強く感じられた「Clin d'Oeil」であった。

日本にもたらすもの

「Clin d'Oeil」の日本版を開催することは以前から考えを温めているが、実施には難しいものがある。第一に、使用される手話が全く異なるということだ。海外の演劇団体を日本に呼ぶには通訳などが必要になるが、現在の日本での舞台通訳だとどうもしっくり来ない。通訳が聴者だからなのか、また演技力が求められるのに演技せず文字を並べての通訳だけでは舞台の雰囲気が壊れる恐れもある。ろう者の役者が通訳することも、うまく舞台と融合した上で表現できればいいと思うが、実際に舞台でろう者の役者が通訳をやるには人数が少ない。一気に多くの海外の演劇団体が来た場合は対応ができなくなる。また字幕でもいいが、ろう者にとって日本語を読みながら演劇を見ることは苦痛でしかない。ろう者の中に日本語が不得意の方もいる。今のところ、いい方法で日本のろう者に楽しんでもらえる環境はまだ実験的な段階にある。国際手話、海外の手話を日本のろう者にも覚えてもらうことが一番早いと思うが、現実的には国際手話を理解するろう者がまだ3%にも満たない。

第二に、日本で受けられる助成のほとんどが「障害のあるなしに関わらず楽しめる」ことがベースになっているという点だ。「Clin d'Oeil」は基本的にろう者が主体となって、ろう者が楽しめるイベントであることが柱となって活動している。聴者に合わせることは一切ない。一方、日本では聴者が楽しめるイベントが数多くあり、ろう者のみが楽しめるイベントは圧倒的に少ない。聴者も楽しめるイベントを作った場合は内容も聴者寄りになってしまう。ろう者が楽しめなくなっては意味がないのである。日本の助成団体に積極的に助成してもらうには、ろう者主体のイベントを開催する意義を強く訴えていく必要があると「Clin d'Oeil」を通して強く感じた。

今年はオリパラの年でもあり、「障害者の芸術」が例年よりも注目されていることは喜ばしいが、オリパラ終了後に「障害者の芸術」がどれだけ残っているのか、注目度もどれだけあるかは着目するべき点でもある。

VISIT

ろう者の多層性としてのクランドイユ

Report

Reporter:

木下 知威　Tomotake Kinoshita

1977年生まれ。日本社会事業大学非常勤講師。博士（工学）。専門は建築計画学、建築史、視覚文化論。幕末から明治・大正期にかけての盲唖学校（盲人・ろう者への教育組織）の建築空間・社会・文化の分析を通じて、盲人と聾唖者、ろう者の形成について考察している。また、ろう者の知覚現象についての記述も行う。著述に「点字以前」「ひとりのサバイブ」『伊沢修二と台湾』「指文字の浸透」など。

ここでは2019年7月4〜7日にわたり、フランス共和国のランス市で開催されたろう者の総合芸術祭「クランドイユ」（Clin d'Oeil）の展示部であるVillageを中心に報告する[1]。会場はComédie（劇場、シアター）、Saint-Ex（シアター）、Village（舞台、飲食スペースなど）とネーミングと機能を区分している。なによりも閑静な市街から会場に足を踏み入れたとき、手話の踊る情景に変化するのが鮮烈だ。

Village の概要

このうち、Villageはランス市のスタジアムの駐車場を野外会場とした場である（図1）。

図1：Village の配置図
（クランドイユ2019年のタイムスケジュールより修正）

図1の左下が入口となっており、セキュリティ・チェックがある。ここを通過すると、子ども向けの遊技場（図1の①）を経て、舞台に出る（図1の⑥、⑪、⑮）。舞台は、DJや音楽演奏のスペースも含む野外と屋内の舞台がある。入替制で曲芸、サインマイムなどのパフォーマンスを鑑賞することができる（図1の⑪、⑮）。

次に、飲食スペース、カンファレンス、ブースの順に説明する。飲食スペースは、ヨーロッパ各地のろう者が運営する飲食店がピザやハンバーガーなど軽食を提供し、飲食しながら歓談ができる（図3）。運営側は賃料を取るが、売上げは各店の収益となる[2]。

図2：野外の舞台（⑪）
右側奥のテントが屋内の舞台（⑮）（筆者撮影、以下同様）

カンファレンスでは、テントにプロジェクター、スクリーン、椅子があり、定期的にろう教育・文化に関するプログラムが開催されていた。フランス手話と国際手話の通訳がつく（図4）。

図3：飲食スペース

1　ランス市は人口約18万人、パリからTGVで約45分のところに位置し、「シャンパーニュ」の生産で知られた、閑静な都市である。観光地としてランス大聖堂や藤田嗣治のチャペル「フジタ礼拝堂」、ランス美術館などがある。

2　ディレクターであるDavid de Keyzer氏の談話より。P16を参照。

図 4：カンファレンス

Villageで最大のスペースを占めるのがブースである（図 1 の㉓）。それぞれのテントに机、椅子、コンセントを含む屋根付きのスペースが提供されている（図 5、図 6）。ここでは、フランス各地のろう者団体や情報保障の推進団体の活動紹介、映像制作、絵画・写真・工芸品などの展示・販売、手話教材の紹介など多種多彩な出展がされている。展示物である絵画・写真などの作品の質は高くないが、しかしながら、出展者と交流を介してろう者の活動について情報を得ることができる。実際、筆者はここでさらに情報収集し、本事業の美術部門における John Wilson氏の講演の企画を固めた（39-41 頁参照）。

図 5：各ブース

図 6：ブースの例

考察

プロデューサーのDavid氏はクランドイユを着想したきっかけとして、各地のろう者たちが孤軍奮闘している実態があり、個々人は小さいがひとつの場に集まれば大きく見えるのではないかと述べていた。また、クランドイユはろう者だけの場ではないことも主張していた。

なるほど、Villageを俯瞰すれば、ろう者による過去・現在・未来へのアプローチが圧縮されているし、Villageの舞台では音を振動として感じられる機械の設置、音楽イベントの実施もあり、軽度・中度の聴覚障害をもつ難聴者も参加できるプログラムも組まれていた。このような、個々人の異なる関心に応じようとする運営側の柔軟な姿勢に、多くの人が集う要因がある。

たとえば、「ろう者の社会」という軸で考えてみよう。ブースには 5 つのろう者の歴史に関する団体が出展しており、書籍・パンフレット、グッズの販売のみならず、パネルでろう教育や当事者運動を解説していた。かつ、演劇とドキュメンタリーにはろう者に取材した内容が選ばれていた。演劇ではナチス・ドイツ時代のろう者を描いた演劇 “Crying Hands” や、現代社会のシリアスな状況を描いた “Off Kilter” が上演された。ドキュメンタリーではスコットランドのろうクラブの中心人物の逸話や人柄を紹介する “Sunderland Deaf Society’s 40” や、かつてカナダの修道院で行われた、ろう女性教育を受けた当事者たちを取材する “Femmes sourdes, dites moi…” が上映された。このように、ブースで他者と直接交流することと、演劇・ドキュメンタリーによる視聴という包括的な体験を通じて、ろう者の社会そのものと接する機会となっている。

よって、クランドイユは様々な聞こえの程度やアイデンティティを持つ人たちの関心に応じようと最大公約数としてのろう者を受け入れる空間として編成されているといえる。このような総合芸術祭を日本で行うには、当事者と専門家によるチームで日本ひいてはアジアにおけるろう者の社会・芸術文化のリサーチを進めながら計画をまとめなければならない。また、障害者差別解消法、障害者雇用促進法、手話言語法などを通じた合理的配慮の視点に立脚しつつ、聴者、難聴者・中途失聴者、自閉スペクトラム症を持つろう者など重複障害者もふくめた最大公約数としての総合的な空間表現をめざす必要がある。

VISIT

Festival Clin d'Oeil, it is city of Deaf.
ろう者の街、クランドイユ Report

Reporter:

牧原 依里 Eri Makihara

映画作家、東京国際ろう映画祭代表。ろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』(2016)を雫境(DAKEI)と共同監督、第20回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査員推薦作品、第71回毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞ノミネート等。既存の映画が聴者による「聴文化」における受容を前提としていることから、ろう者当事者としての「ろう文化」の視点から問い返す映画表現を実践。また2017年には東京国際ろう映画祭を立ち上げ、ろう・難聴当事者の人材育成と、ろう者と聴者が集う場のコミュニティづくりに努めている。

以前から折に触れて「一度は行くべき」と日本や外国の様々なろう者たちから存在を伺っていた、ヨーロッパ最大のろう芸術祭、フェスティバル・クランドイユ。しかしなかなかタイミングが合わなく、今回ようやくその機会が叶った。感想を一言で言うなら、「手話の街」は存在していた。まさにファンタティックな体験だった。初めて訪れた私は会場に到着した途端、スケールのでかさにど肝を抜かれた。手話で話している人たちが次から次へと会場に集まり、人の列がどんどん増えていく。こんな風景は日本では見たことがない。後から聞くと4日間で約1万6000人集まったという。

会場1時間前から長蛇の行列

ろう者が主役のフェスティバル

このフェスティバルは演劇をはじめ、映画や大道芸、ワークショップと様々なイベントが展開されているが、一番人気なのは演劇やパフォーマンスだった。開演1時間前になると人が並び始め、ドアが開かれると一気にあっという間に850人分の席が埋め尽くされてしまう。

今回の演劇プログラムの中で印象的な作品が3つあった。ノルウェーの『Crying Hands』、スウェーデンの『Home』、イギリスの『Off Kilter』だ。いずれも手話ならではのポテンシャルを最大限に引き出した身体表現とともにろう者・聴者を超えた、人間についてのテーマを提示してきた。

さらに印象に残ったのは彼らの演技が終わった後に起こる大きな地響きだった。フランスでは手をひらひらとさせる拍手だけではなく、足踏みも行う。大勢の観客がスタンディングオベーションしながら足踏みを行うたびに、日本のろう文化にはない、ヨーロッパならではのろう文化に触れられ、言葉にできない感情を覚えた。これはきっと聴者が初めてひらひらの拍手を目にした時の感情と似ているのかもしれない。

大きな地響きを味わった大劇場

映画は専用劇場（100人収容）にて短編を主に、4日間にわたって上映されていた。こちらもすぐ満員となり、全てのプログラムを観れなかったが、短編特集を2本ほど拝見することができた。東京国際ろう映画祭では長編・中編をメインに映画としての強度と「ろう」という概念に対して新しい表現を求めているのに対して、このフェスティバルでは、ろう者が撮影し、ろう者が活躍している映画－ろう文化そのものを表している映画を中心に取り上げている印象を受けた。この辺りは「ろう者が主役である」というフェスティバルのスタンスが大きく反映されていることが窺える。また、映画に流れている音響が観客に振動として伝わるように意図的に大きく

していたことから上映環境にもろう文化が組み込まれていることが興味深かった。

他、巨大な広場のVillageでは、定番のハンバーガーやピザ、サラダのほか、メキシコ料理、レバノン料理など、様々なバラエティに溢れる屋台が 15 店ほど出店され、あちこち手話が飛び交っていた。また日本でいういわゆるコミックマーケットのようなブースがあり、様々な国の会社やアーティストが活動を PR したり物などを販売していて、いわゆるヨーロッパにおけるろうのトレンドがここで知ることができた。

あちこちで手話が飛び交う Village

ろう者独特の手話芸術を披露するパーフォーマーと
観劇する参加者

ろう者によるろう者のための祭りの意図

フェスティバル・クランドイユに 4 日間参加し、改めて国際交流の意義を考えさせられた。Villageで「今、こんなに大勢いるのに、全く音が聴こえない。『聴者』の声が聴こえない。とても不思議な気持ち」と言っていた通訳者の言葉が忘れられない。そして何といっても、知らない人でもすぐ仲良くなれた。車ではるばるやってきたイギリス人、オーストリアで過ごしていて最近東京に行ってきた中国人、ろう者の姉をもつ聴者と結婚したオーストラリア人、日本手話が流暢なイタリア人、盲ろう者へのガイド資格を持っているドイツ人夫婦、手話を知らないけれどもこの雰囲気が好きで毎回参加しているランスのおじいちゃんなど、この 4 日間、様々な人々との素敵な出会いがあった。私は国際手話もアメリカ手話もカタコトレベルしかできない。しかし何故か不思議なほどに手話で色々と会話ができた。それが視覚言語の手話がもつ強みなのだと改めて実感する。

代表のデビット氏は「ろう者によるろう者のための祭り」を信念としている。一見、聴者を排除する考え方に見えるが、実際にこのフェスティバルを経験してみると、そうではなく、ろう者による新しい価値観を提供することを示したいのだと分かる。このフェティバルはまさに手話で話す人のための場所であり、ろう者で運営しているからこそ生み出される一体感があった。このフェスティバルで「ろう者の世界」の感覚と知覚に触れられた聴者は、今までにない多幸感を味わうに違いない。この 4 日間だけ、誰もが手話を使う街。それがフェスティバル・クランドイユだった。

残念ながら日本では国際レベルのろう芸術祭が存在しなく、国際手話通訳者の育成も追いついていない。それは日本だけではなく中国や台湾、韓国も同様だ（ただしろう映画祭に関しては日本、台湾、上海、香港で定期的に開催され始めている）。

「ろう」をテーマにした国際的なフェスティバルをアジアでも行うことによって、アジアの人々は様々な国のろう芸術を知る機会が増え、多角的、多面的な価値観の獲得が容易になるだろう。それはすなわちグローバル感覚の育成が養われることを意味するとともに、アジアでのろう者クリエイターや芸術鑑賞者の育成にも繋がる。

国と国の境界をはるばると飛び越える視覚言語－手話のコミュニケーションを誰もが目の当たりにできる場が日本でも開かれることを期待してやまない。

日本もこのような風景が訪れることを願って

VISIT

Festival Clin d'Oeil 創設者 デビッド・デ・ケイザーへのインタビュー Interview

構成：牧原 依里　　国際手話通訳：江副 悟史

Interviewee:

デビッド・デ・ケイザー David de Keyzer

フランス人ろう者。Festival Clin d'Oeil 創設者およびディレクター。映像の世界で育ち、IVT（フランスろう者劇団）に俳優として入団。その後映画界に入りビデオアシスタントを経て監督となる。2000年にドキュメンタリー作品の DVD 配給および演劇活動を目的とするCinéSourdsを設立。2003年、国を問わず全ての芸術分野においてろうアーティストの創造と表現を保護することを目的に Festival Clin d'Oeil を創設。

クランドイユの創設者で今なお、フェスを牽引するデビッド・デ・ケイザー氏へ、フェスを締めくくるデフパーティーの賑わいの中、視察メンバー全員でロングインタビューを行った。基本的にヨーロッパをベースとした国際手話でやりとりされ、江副氏が日本手話へ、さらに同行の通訳者が日本語に訳す形で進行した。

── このフェスティバルを創設した理由は？デフコミュニティに与えた影響は？

今までろうに関するイベントを見てきたが、映画、教育、スポーツなどジャンルによって独立していてろう者がバラバラになっていた。人数が減ってきているし、今のままだと聴者から見てろう者は弱者的に捉えられてしまうと感じたんだ。また今までろう者にまつわる総合的なフェスティバルを行ったことがなかったし、聴者とつながる場の一つとしてフェスティバルはかなり有効だと感じたからだ。結果的にたくさんのろう者が集まり、様々な団体から見てこのフェスティバルは大事な場となっている。

── このフェスティバルを設立した時からたくさんの方々を動員することを目標としていたのか？

もちろん！そのためにプログラムに子ども向けのワークショップや講演、実技のワークショップ、演劇、映画などを盛り込んでいった。その度にまだ加わっていないジャンルの団体からさらに新しい提案がくる。様々な情報が舞い込んでくるので、それらを精査してプログラムに盛り込んでいく。

フェスティバルは私のアイデアだけでは成り立たない。様々な人たちの意見を取り入れ、スポンサー獲得に成功したらさらにプログラムに加えていく。そうやってフェスティバルが成り立っていくんだ。

2年ごとに計画を立てていて、ほぼ毎日仕事をしている。外国に行って視察したりとかね。

── ランス市に与えた影響は？

ろう者は「マイノリティで問題を多く起こす人」ではなく、ポジティブに見せていく必要がある。

実際にこの期間ではろう者はマジョリティ側になる。様々な国のろう者と交流ができることは聴者には考えられないことだ。それがランス市に与えた影響だ。

── デフコミュニティには？

もちろん、フランスだけではなくヨーロッパ全体に影響を与えている。当初はデフコミュニティをサポートしていたが、今は逆にサポートしてもらったり、お互いに力が大きくなっている。現にこのフェスティバルのスポンサーはほとんどろう関係の団体や会社からだ。

── 2003 年の時はアーティストの参加規模も小さかったようだが？

はい、最初は参加者が少なかったんだけど、だんだん増えてきた。フェスティバルが生まれたことによってろう者のアーティストも増えてきたんだ。

── 構成スタッフは？

運営は協会として行っていて、コアメンバーが10人。映像制作、教育関係、機械関係などそれぞれ専門家に来てもらって役割を分けている。ろう者、聴者、協働しながら進めている。比率としてはろう者が高め。聴者の役割は、コミュニケーションアシスタント（通訳者）と音楽調整、現場施設、警備など様々だ。今回のボランティアスタッフは180人いる。それに機材関係や警備員などで250人いるね。社員としては3人。そのうち2人はろう、1人は聴者。聴者はコミュニケーションや交渉でのサポート、ろう者は僕とフィリップ。彼はチケット、ス

ケジュール、お金などの管理を行っている。

── ボランティアスタッフの募集方法は？

一つ目は仕事内容に応じてこちらからのスカウト、二つ目は向こうからの自主的な申し込み。

── プログラムの基準は？

人々が求めるもの、また例えば女性抑圧問題（#Me too）など社会情勢に合わせて取り上げている。以前、戦争や貧困問題が起こった年は「苦しみや悲しみを笑いに変える」をテーマにプログラムを組んだ。

── プログラマーはアートディレクターに依頼しているのか？

ほとんど僕が組んでいる。演劇、映画、ストリート演劇などは、担当者とともに視察、査定して確認して決めている。専門家に任せてはいない。ただ細い部分に関しては組織の中に例えばドリンク担当、チケット担当、ブース担当、情報保障担当、スポンサー・パートナー、舞台担当など様々な担当者が担っている。

僕がやることといえば、テーマを決めて、それぞれを担当者に任せた後に精査・助言することだ。

── 演出家や映画監督からオファーは来るのか。

たくさん来るよ。例えば映画部門では120作品来て、33作品選んだんだ。

── 演劇の場合はどうやって判断するのか？

三つ方法がある。一つ目はビデオで始めから終わりまで撮った演劇作品を送ってもらう。二つ目は実際に視察に行く。三つ目は今まで出演してもらった団体、他の作品をすでに見ていて評価している団体。

共通する条件は連絡がきちんと取れるか、情報共有ができる能力がある団体かどうか、だね。

── 今回何かトラブルなどは？

トイレ問題だね。清掃員をすぐ依頼したけど。人が多すぎてトイレが壊れたり対応ができなかった。次回はもっと増やさないとね。

舞台も照明の調整などで時間がずれたりしている。カナダの演劇団体は、機材のトラブルがあって日時がズレてしまったけど、それぐらいであとはそんなに大きなトラブルは起きていないね。

── トラブルに対してどのように把握している？

メール、聴者からの電話、テレビ電話などを活用して問題が大きくならないように努めている。

もし起こってしまったら聴者にすぐ電話を頼んで至急対応をお願いしている。

── このフェスティバルがヨーロッパ、世界中に広まったことによって何が変わった？

ろう者たちの考え方が変わった。ろう者だけできるというのではなく、聴者と互いに協働しても行えるのだということを、彼らは知った。それぞれプラスの力として受け入れていく必要があるのだということが分かり始めている。

また色々な国がここに集うから、様々な考え方があることもここで知ることができる。例えば、フランスと日本は経済的に豊かだよね。でも貧乏な国ではエンターテイメントも教育も進んでいない。ところが実際にそのような場所に行くと、その国ならではの豊かさや価値観などを学ぶことができ、視野が広がる。そのあとに自分の国に戻ると、その国に対して考え方や見え方が変わるよね。それとフェスティバルは同じようなものだと思っている。

── 今年のプログラムを見るとヨーロッパが多い印象を受けたが。

その時の状況によって変わるね。2年前の場合はブラジルやインドも多かった。今年の場合は南アフリカや中国もけっこう来ている。

── いつからフェスティバルの準備を始めているのか？

フェスティバルが終わった後の1ヶ月は後処理、次の1ヶ月はバカンス、その後からもうスタート。スポンサーや会場、体制、プログラム、ミーティングなどを計画的に行っている。

── 収入はどのぐらい？

2年間で全て使い切るようにしている。100万ユーロだね（約1億2千万円）。国やランス市などの公的資金は全体の20%。フランスの文化省、教育省、ランス市など様々なところを全てまとめて20%。残りは55%がチケット代、15%がスポンサー、ドリンク代が10%。食事代の売り上げは全てお店へ。こちらからは場所代として一律同じ金額で提供している。

スポンサーは少ない。スポンサーは固定していなくてその年ごとに変わる。今年はシャンパン関係の会社は2社ついている。また車の会社の場合、ルノーは3回連続でスポンサーについてくれた。次はベンツで4回連続。

これはたまたまベンツの知り合いと仲がよかったからそれでもらえたんだ。

でも、フェスティバルに合った車の会社が良かったから、フェスで使いたい車を持っている会社に声かけているんだ。今はフォード社だ。車関係から二つオファーがあったら、高い方を選ぶし、車の会社もその時に変わるよ。次は車を15台使わせてくれる会社をスポンサーに出来ると良いなと考えている。

支出については50%が人件費でその中に出演者への謝礼や給料などが含まれている。ボランティアスタッフへの謝礼はない。その代わりに宿泊、ご飯、Tシャツ、ドリンクを無償で提供する（ボランティアたちとそのように契約書を交わしている）。警備員、機材は外注。残りの50%が機材費。宣伝費も含まれている。

── 宣伝はどのように行っている？

宣伝は昔と比べてそんなに頑張っていない。今はみんなもうSNS（フェイスブックなど）などで知っているから。チラシは印刷していない。木（紙）ももったいないしね。ただ聴者向けにはメディア（新聞、ラジオテレビ）なども使う。ろう者はSNSのみで十分。

── 最初は宣伝に力を入れたのか？

もちろん、かなり宣伝費を使ったよ。3Dアニメーションが得意な人が多かったから、その人たちにお願いしてフェスティバルのプロモーション映像に3Dアニメーションを使って宣伝したんだ。

── 手話がわからない人との関わり方は？

手話を目の当たりにするのも楽しめるし、デフパーティーではスピーカーや音を使って振動を出している。そこはろう者も聴者も関係なくみんな楽しめるよ。そこに言語の壁はない。映像もあるしね。ゲームや展示会もそうだし、カンファレンスに通訳者もいる。ただ劇の場合は申し訳ないけど、手話がわからない人への情報保障は強要していない。劇団のスタンスに任せる方法だよ。その手話の舞台を見てインスパイアされるなど、その人の楽しみ方は人それぞれだし自由だ。

── 試しにランス市の聴者にこのフェスティバルの存在を聞いてみたら、みんな「知っている」と答えたが、「参加している？」と聞いたら、参加していないようだった。ランス市民を巻き込むためにツアーなどのプログラムを組むのはどうか？

実は以前に試しに大通りでパフォーマンスをやったんだ。でも問題があった。それは市からの支援が少なかったことだ。でも市民は無料で参加できるんだ。遠くからやってきた参加者はお金を支払っているのに。向こうから希望してきたんだけど、違和感があったし、それはフェアじゃないと伝えた。パフォーマンスしてもいいけどそれならもっと支援をくれ、と。でも少なかったから大通りでのパフォーマンスは断ったんだ。ランス市民がお金を払ってここに参加すれば良いのだから。聴者にとってのフェスティバルはたくさんあるし、彼らは自由に参加できるよね。でもろう者にとってのフェスティバルはここしかないんだ。ただ具体的な数はわからないものの、回を重ねるほど聴者の参加者が増えているのは確かだよ。

── デビッドはどんな子どもだった？

14,15歳頃から少しずつリーダーっぽくなっていったかも。それまでは普通に何も考えていない人だったよ。リーダー気質というより、周りをリスペクトしていたんじゃないかな。人々との関わりを大事にしているんだ。それが結果的に僕をリーダーに押し上げてくれたんだと思うよ。

── それをどうやって学んだの？

多分…僕はろう者だけど、聴者との関わりが多かったんだ。親は手話という世界を知らなかったから、それまでは口話だった。13歳の時にろう学校で手話と出会ったんだ。その影響が自分にとって、アイデンティティというか自分を見つめるきっかけになったんだ。手話のおかげで自分が誰なのか、自分が何者なのか見つめられるようになった。手話という言語に感謝している。ろう社会から色々なものを与えてもらったから、フェスティバルを通して恩返しをしたいと思ったんだ。

設立者のデビッド氏にインタビューする様子

［2019年7月7日 Village にてインタビュー実施］

VISIT

クランドイユ芸術祭同行記 Journal

Reporter:

小池 紀子 Noriko Koike

トット基金事務局長。1975年東京外国語大学フランス科卒。41inc入社。黒澤明監督『デルス・ウザーラ』等のプロデューサー秘書として映画、演劇制作の基礎を学ぶ。制作を担当した主な作品はミュージカル『ザ・ファンタスティックス』『ハッピーエンド（41inc）』『ガラスの動物園』『冬のライオン』（演劇集団円）など。傍ら通訳・翻訳業務、国際間コーディネート業務にも従事し、映画作品の字幕もてがける。（岡本喜八監督『イースト・ミーツ・ウェスト』など）。日本ろう者劇団ではメンバーとともに制作をつとめる。

2013年の第6回クランドイユ芸術祭において日本は名誉招待国となり、ろう者の演劇を代表して手話狂言がオープニングプログラムを飾った。初めて訪れたランスは、まさに「手話の街」と化していた。フェスの期間中、ホテルでも、カフェでも、街の人々はごく自然に世界中から集まったろう者を「おもてなし」していた。ろう者たちはこの街で輝いていた。自分たちの言語で演じられる演劇や映画を鑑賞し、面白ければアーティストと話し込み（面白くなければ容赦なく席を立つ！）、夜を徹して語り合う。10周年を迎えたこの年は、国庫の補助で子ども向けの多彩なプログラムが用意され、公演の合間にフランスのろう児対象のワークショップで飛び回った。移動にはボランティアが組織的に機能し、各会場ではフェスのスタッフであることに誇りを持ったろう者や手話スタッフが手際よくすべての仕事をこなしていた。日本ろう者劇団にとって、このとき一つの発見があった。フランスでは、1980年代にIVT（International Visual Theatre）を中心に盛んになったろう者の演劇活動が、ろう者が自らのアイデンティティを確立するベクトルとなり、そのことはすでに定説となっている。奇しくも日本でも、アメリカのNTD（National Theater of the Deaf）の来日公演をきっかけに、1980年に活動を始めた「東京ろう演劇サークル」（トット基金の付帯劇団となり「日本ろう者劇団」と改称）などを中心として、演劇はろう者の間で流行し、社会参加を促してきた。米・仏・日のろう者たちは、演劇という共通した道しるべにより、同じ道をたどってきたのだ。

東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が決まり、「文化オリンピアード」が謳われて、関係省庁による芸術文化に対するさまざまな支援が始まったとき、これまで演劇に携わってきた多くのろう者や関係者の脳裏に浮かんだのは、あの「手話の街」の光景だった。「あのフェスティバルを日本でもやりたい！」。こうして始まったのが本事業の企画である。

2019年7月3日（水）

本隊5名（小野寺、藤田、牧原、和田、小池）羽田集合。初顔合わせの挨拶もそこそこにAF便でパリに向かう。それぞれが多忙の中、にわか編成の視察団である。機中は格好のオリエンテーションの場となる…。

7月4日（木）

バルーンアーチで彩られている Village の入口

早朝にパリ着。車でランスに向かう。連日40度を超す記録的な猛暑と聞いていたが、夜明け前の北フランスは寒い。2時間程でランスの街に入る。街の北に位置する駅に近いホテルで、先発した江副悟史、ロンドンで個人的にろう者の美術活動について調査してきた木下知威と合流。すぐフェスの会場へ。徒歩30分程で本部のある「ヴィレッジ」に到着。実は「ランスは今年で最後」という噂があり、視察が決まった時点でネットでは「チケット完売」と表示されていた。最後のランスを関係者に見て貰うべく、フェス責任者のデビッド（Devid de Keizer）に頼んで何とかフリーパスを予約していた。一人180ユーロの代金は振り込んであったものの、長蛇

の列を見て心配になる。果たしてチケットを無事ゲットできるのか？どうやら音声言語は通用しないらしい…。国際手話に堪能な江副が実力を発揮、雑踏の中、ＯＫ！と手を振る。観客は申込順に8つのグループに分けられ、指定された日時に観劇する。最初の観劇（『W＆M』/ フランス）を待つ間、ヴィレッジで腹ごしらえ。10 ユーロのカードを購入してサンドイッチをかじる。ヴィレッジには万国旗や色とりどりのテントが張られ、大道芸やクッキングショー、国際色豊かな物販ブースが立ち並ぶ。アーティストも、観客も、とにかくよく喋る。世界中から集まったろう者たちは再会を喜び合い、抱き合い、初対面の場合は冗談を交わし、すぐ打ちとける。本当に羨ましい。

ランス最初の夜、10 時を過ぎてようやく暗くなった道を、営業中の店を探しながら、いま見た芝居について話す。話題は「聞こえないこと」や「見えないこと」そして「盲ろうであること」に及ぶ。やっと見つけた居酒屋におさまったとき、小野寺が言った。「さっき牧原さんが『盲ろうになっても私は大丈夫』と言ったけど、その言葉だけで僕は牧原さんを信用するね。」映画や演劇を志す者には必要な覚悟を、さらりと教えてくれた演出家の言葉が、何だか嬉しい。この夜、最後の参加者、東京藝術大学の荒木夏実がランス入り。

視察 1 日目 Village 内にて（左から和田夏実、藤田桃子、小野寺修二、小池紀子、牧原依里、木下知威）

7月5日（金）

朝のロビーで荒木と小野寺、藤田は初対面の挨拶。全員揃ってトラムで会場に向かう。CO_2削減対策で欧州では交通手段にトラムを採用する街が多いと聞くが、ランスでもメインストリートにトラムが走り、レールを辿っていけば迷わず目的地に着く。歴代の王が戴冠式を行ったというカテドラルを有し、「王様の街」と呼ばれる街並みは美しい。演劇の会場は「ラ・コメディ（文字通り「演劇」の意）」と呼ばれる劇場、映画上映の会場は、かの『星の王子さま』の「サンテクジュペリ記念館」である。

大劇場 la Comedie

皆でノルウェーの「劇団マヌ」による『Crying Hands』を観る。ナチス政権下に生きたろう者の話を、よく訓練された俳優たちが手話で物語る。シンプルな舞台と照明。圧倒的な手話の説得力。音声英語によりかろうじて話の流れについていく（字幕や音声の有無は参加団体に任されている）。観劇後、近くのカフェで芝居を振り返る。江副が、国際手話で語られたストーリーの詳細をよどみなく日本手話で再現し、手話通訳の和田が音声化する。英語音声を完璧に理解していた荒木がときどき口をはさむ。「ガートルードはろう者なのかしら？」かならずしもろう者が被害者とは限らない。「ろう者だって加害者になることはあるはず」と荒木は言う。いま見た演劇はそのことも含んでいた、と。「この作品を日本に呼ぶべきよ…」。日本ろう者劇団は 2005年に IVT 所属のトルコ人演出家レベント（Levent Beskardes）を日本に招いて『ハンナ』というナチス政権下の「断種法」にまつわる実話を演劇化した作品を上演している。レベントはその時代のろう者について 10年をかけて取材し、題材は重いが演劇的魅力溢れる愛すべき作品に仕立てた。日本ろう者劇団のこのときの公演を、審査員のひとりは朝日演劇賞に推薦している。（この『ハンナ』がデビッドが演劇に目覚めるきっかけになったことが後にわかる。）

円卓の８人

この夜、結団式を兼ねて全員で夕食。先に着いた江副と木下においしい店の予約を頼んでおいたところ、裏通りにある La Vigneraie という小さな店を見つけてくれた。何しろここはシャンパーニュ地方の中心地、シャンパンのメッカである。丸い大きなテーブルを 8 人が囲み、ウキウキと皆メニューをのぞき込む。ろう者（手話を第一言語とする人）3 人、日本語が母語の者 4 人、ろう者の両親に育てられたバイリンガル（CODA＝Child

of Deaf Adult）1人の混成チーム。年齢も、社会での位置も異なる。この夜のスポンサー、トット基金理事長の「トットちゃん」に感謝しつつ、まずはシャンパンで乾杯！おいしい食事とグラスがすすむにつれ、一人ひとりの豊かな個性が解きほぐされてくる。円卓は隣の人との境界をなくし、心のバリアを開いてくれる。そういえば仏文学に『円卓の騎士〜アーサー王物語』という作品があった。自由と平等の国フランスで「円卓」はどんな意味を持っているのだろう？調べてみたくなった。（余談だが、世界の映画作家黒澤明の御殿場の別荘にも８人がけの大きな円卓がある。）

7月6日（土）

３日目。視察団は意欲的に出品作を見る。演劇の主要な７作品のうち、この日はアメリカの『Magic Morgan』と、今年の招待国カナダの『The Black Drum』を観劇。その合間にサンテクジュペリ記念館に行って気になる映像作品を見る。が、ぎりぎりで駆けつけても満員で入れない。追加上映がアナウンスされる。会場敷地内の広場には、常に開演を待つ長蛇の列。そこはろう者たちの社交場だ。陽射しは午後４時頃が最も強く、じりじりと熱い。別行動をとっていた美術クルーと合流。市のはずれにある藤田嗣治が眠る教会に行ってきたという。カテドラルにはシャガールのステンドグラスなどもあり、街は美術作品の宝庫でもあるようだ。この夜は自由行動。ろう者の皆さんは一晩中盛り上がっているのだろう。

7月7日（日）

最終日。朝食をとりながら、この夜予定しているデビッドのインタビューの内容を打ち合わせる。江副情報によると、デビッドの父君が、今回のフェスを前に亡くなったのだという。お父さんが「実力者」だと聞いていたが、仏映画界の代表的ＤＰ（Director of Photography＝カメラマン）だった由。20時にヴィレッジに集合して全員でインタビューに臨むことにする。

街の人へのインタビューを試みる。「あなたにとってクランドイユとは？」「人が沢山来るよね。」とタクシーの運転手。ホテルのマダムも「いろんな人が来るわ。２年に１回？それで十分よ。ずっと続けて欲しいわ。」「会場に足を運んだことは？」「ないわ。誰でも入れるの？ろう者の人しか入れないと思ってた。行ってみたいけど、催しはほかにも沢山あるし…。」カフェでも、土産物店でも、同様の答えが返ってきた。異文化交流が進むのはなかなか難しいが、観光誘致はまずまずといったところか。帰途のTGV（国営の新幹線）の切符を購入した後、駅から会場までトラムのレールを辿りながら、今度は道々出会った10人の人に道を尋ねてみた。10人中４人がろう者だった。

ヴィレッジで行われたエンディング・セレモニーは快活だった。デビッドはじめ、市の要職にある人や関係者が次々と登壇し、フェスの歴史や成果、展望を述べる。それにしても江副、和田両人の通訳者としての技量は見事だ。感謝！

約束の時間に、2013年の手話狂言公演の際お世話になったオンベリーヌが私たちを迎えてくれた。さっそく聞きたかったことを尋ねる。「クランドイユは今年で終わりなの？」この質問を何人かのスタッフにしてみたのだが、「私は知らない」と、誰も答えてくれなかったのだ。「ノン、またやるわ」と彼女は明確に答えてくれた。「でもデビッドは新しいフェスも準備中なのよ。いまワシントンとパリを行ったり来たりよ。」

日本から持参したシャンパンのような発泡加工をした祝い酒を土産に渡すと、デビッドはヴィレッジのハンバーガーをご馳走してくれた。皆の飲み物の希望を聞き、自ら手渡し、私たちが「おいしい」というのを確認してからインタビューは始まった。（詳細はP15-）

22時。たっぷり２時間のインタビューを終え、記念撮影をしてデビッドと別れ、会場を後にする。外に出て振り返ると、ヴィレッジは賑やかな音楽と歓声に包まれ、照明を浴びて、漸く夜の闇が下りたランスの街の一角に、不夜城のように浮かび上がっていた。

デビッド氏インタビュー後に記念撮影
（左から右回りに小池紀子、牧原依里、木下知威、和田夏実、デビッド・デ・ケイザー、藤田桃子、荒木夏実、江副悟史、小野寺修二）

VISIT

ゲスト視察メンバーの感想 Review

小野寺 修二 ［演劇部門］

演出家／カンパニーデラシネラ主宰

このフェスティバルでは観客がいくつかのグループに分けられ、4日間で主要な演目を観る順番、時間、会場が決められていた。フェスティバルでは自由に好きなものを自分で選んで観ると思っていたので、このシステムを最初新鮮に思った。しかし、普段自分が選ばないものも含まれていたため、思わぬものに出会えたり、演目ごとの手話における表現の違いや聴者観客への意識などを感じたりした。また連日、午前中からスケジュールが組まれており、スケジュール外の時間で会場内で自由に観られるレクチャーやパフォーマンスを観たり、屋台ゾーンで食事を楽しんだり、街を散策したりと有意義に時間を過ごした。演目数が限られているために可能なシステムだと思うが、着実に回を重ね進んできた、新しいフェスティバルの形なのだと実感した。

上記システムのお陰で、大きな意味での座席の争奪戦はないはずなのに、皆楽しそうに開演のかなり前から行列を作り、待つ間、会話を楽しんでいる。開場の30分前にはとっくに列が出来上がり、晴れ上がった空の下、皆思い思いに話し込んでいる。それに驚く自分は普段、随分と合理主義の只中にいるよう。どこからどこまでが元々の知り合いなのだろう、と不思議に思うほど、皆が気安く話している。僕自身、目が合った時に何のてらいもなく話しかけられ、このフェスティバルにおける流儀とその意義を肌で感じた。知り合い、知り合いでないと関係なく、既に共有していることを糸口に、他者を尊重する空気と寛容さがあった。残念ながら手話言語を獲得していないため詳しくは分からないが、手話は各国独自のものと聞いていたのに、問題なく各々でコミュニケーションを取っている。フェスティバルの本来の目的は、芸術や表現に出会い刺激的な価値観に出会うことだと思っていたが、それと同様に違う価値観を持った人と出会うということの素晴らしさを改めて感じる機会となった。

今回特に印象に残ったのは、ノルウェーのTeater Manuによる『Crying Hands』。世界でも数少ない、専用劇場を持っているろう者劇団とのこと。90分の素晴らしい強度に圧倒された。世界中でツアーも多数行っているとのことで、聴者への配慮も印象的で、多様な人と繋がろうとする意識と、そのクリエーションにおける想像力に、底知れない積み重ねを見た。そしてイギリスのRaw Material Artsによる『Off Kilter』。四日間で観た様々なジャンルの舞台作品のうち、唯一のソロマイム作品。(プログラムには一切マイムの文字はなく、そうは言わないのが主流か)引き込まれる丁寧な質感が目白押しで、あっという間の60分。マイムの雄弁さ、可能性を今フェスティバルで再確認出来たのは自身にとって背中を押される嬉しい発見だった。

藤田 桃子 ［演劇部門］

パフォーマー／カンパニーデラシネラメンバー

2019年7月、フランスのランス（REIMS）にて開催のFestival Clin d'Oeil視察に同行させて頂いた。ヨーロッパにおけるろう文化の芸術祭。私は、20年近くマイムを主とした舞台活動を続けており、これまでアビニョンやエジンバラ、ブライトンといったヨーロッパでの演劇祭に参加したことがある。街をあげての祭り、そしてそれが芸術に特化した祭りだということに、大変驚いたものだった。街全体をおおう一体感、多幸感、そして何と言っても成熟した社会だと肌で感じるのは、悠々とした当たり前感だった。フェスティバルの歴史がどっしりとあり、昨日今日始まった思いつきではない、社会に対しての芸術の必然があった。日本において一朝一夕に真似出来ることではないが、自分たちの表現が、社会との結びつきとしては感じられていなかった当時の私にとって、その後折に触れ思い返す命題となっている。

今回のFestival Clin d'Oeilがろう者のフェスティバルということは聞いていたが、どんな演目が上演されるか、観客はどういう方達だろう、明確にイメージがわかないまま会場入りした。抜けるような青い空の下、演劇や映画、マイムやジャグリングなど劇場やストリートで様々な演目が上演されていた。私が初めて参加したアビニョン演劇祭での興奮と同じく、街中をプログラム片手に歩き回る人がたくさんいる。会場だけでなく、カフェや駅

で、手話がものすごい勢いで飛び交い、国を超えてどんどん輪が広がっていくさまを目の当たりにした。Clin d'Oeil は2003年に始まったフェスティバルだが、以来2年に一度開催されており、動員は年々勢いよく増えているとのこと。来場者の満ち足りた顔が印象的だった。腕にfree passにあたるブレスレットを巻くのだが目印のようでもあり、ランスの街を歩くとたくさんの笑顔と目が合った。国ごとに手話が違うと聞いていたが、初めての人同士、会話が弾みあっという間の大賑わい。「あなたたち日本から？この前、日本に行ったよ」ポジティブなエネルギーが充満しているのを感じた。ランスの夏の風物詩のようで、街にフェスティバルがすっかり溶け込んでいた。ヨーロッパのみならず、世界中からこのフェスティバルを楽しみに集まっていることが感じられた。豊かさについて大いに考えるきっかけとなった今回のフェスティバル。想像をはるかに超える、新しい文化と出会う機会だった。

荒木 夏実 ［美術部門］
東京藝術大学美術学部准教授

「クランドイユ」の会場を訪れてまず圧倒されたのは、世界中から集まったろう者たちの活気だった。どこへ行っても楽しそうな手話のおしゃべりが目に入ってくる。国際手話やフランス手話を使って初めて会う人もすぐ意気投合する。たとえ海外の手話に精通していなくても意思疎通は容易な様子で、日本人のろう者たちも彼らと和気あいあいだ。ランスの街全体も、この世界最大規模のろう者のフェスティバルにすっかり馴染んでいて、手話のコミュニケーションを自然に受け入れいている。ここにいる人たちは誰もが仲間なのだ。これまで味わったことのない、平和でリラックスした特有の雰囲気に感動した。

連日鑑賞したろう者の演劇は、手話のみの演目も多いため私には理解できないものもあったが、最も印象に残ったのはノルウェーの「劇団マヌ」による『叫ぶ手：ヒトラーのドイツにおけるろう者たち』という芝居だ。手話だけでなく英語のナレーターが演者に含まれていたので、聴者でもストーリーを把握することができた。ナチスドイツの時代のろう者にスポットを当てた意欲作で、歴史的リサーチと、ホロコーストを生き延びた10人のろう者へのインタビューに基づいており、ドキュメンタリーに近いフィクションとなっている。当時の記録写真が舞台の壁に効果的に投影され、臨場感あふれる演出であった。

またシンガポール出身でグラスゴーを拠点に世界的に活躍するラメシュ・メイヤパン（Ramesh Meyyappan）演ずる一人芝居『Off Kilter（狂った世界）』も秀逸だった。マイム、手品などさまざまな身体表現を駆使して一切の言葉なしに見せる心理劇は、現代を生きる誰もが感じたことのある不安と恐怖を、笑いを伴うコメディーとして見事に描いていた。

「劇団マヌ」もメイヤパンも、ろう者としてのアイデンティティを誇りつつも、ろう者と聴者の境界を超えて観客を魅了する芸術性を追求していた。このような完成度の高い表現を実現することのできる背景に興味が沸き調べたところ、「劇団マヌ」は世界有数のろう者劇団としてオスロに専用の劇場を構え、定期公演、ツアー、リサーチ、脚本から製作、演技教育など多岐にわたって活発な活動を続けている。ノルウェー政府も国として劇団をバックアップしている。このような恵まれた環境によって、演技はもちろんのこと、膨大なリサーチや卓越した脚本、演出の実現が可能になっているのだろう。

一方のメイヤパンは、聴者の両親のもとインドに生まれたが、ろう児のより良い教育のために彼が4才の時に家族がシンガポールに移住、ろう学校に進学する。彼は学校時代を「安全で小さな天国」と振り返っている。シンガポールの演劇界で活躍後、さらなる学びと活動の場を求めてスコットランドのグラスゴーへ拠点を移し、国際的な役者の地位を確立した。（“How a deaf theatre actor from Singapore made himself heard on the big stage” 14 Oct 2017, Channel News Asia）

ノルウェーの国家規模で取り組む芸術支援の姿勢にも、メイヤパンの表現の高みを目指してチャレンジし続ける態度にも感嘆する。

このような優れたパフォーマンスを鑑賞し、関係者どおしが意見交換し、なにより世界中のろう者が集って楽しむことのできる「クランドイユ」は、ろう者にとって芸術を通した素晴らしい交流の場となっている。それを演者や観客の熱気を通じて感じることができたのは幸運であった。

※朝日新聞 GLOBE+ にも筆者のレポートを掲載しています。
（2019年12月21日号 https://globe.asahi.com/article/12933955）

育成×手話×芸術プロジェクト

演劇部門

＜演劇部門のロゴマークについて＞
日本手話で「演劇」を表しています（ロゴデザイン：飯島愛美）

THEATER

演劇部門　全体概要　Overview

トット基金の付帯劇団である日本ろう者劇団は1980年に設立して以来、日本におけるろう者の演劇を専門に行う劇団として、手話を生かした演劇作品づくりを行ってきた。しかし、設立から40年経ち、創立メンバーの高齢化により、演劇を継続的に学ぶことが困難になってきた。また、系統だったメソッドを確立しておらず、メンバー個々の自主的な学びに委ねられてきた。近年は劇団に入団せず、個人で表現活動を志すろう者が出てきており、学ぶ機会を広く提供する必要性がある。そうしたことから、ろう者が手話で学ぶ機会を意図的に提供することを目指して、「学ぶ」(Learning)、「研究」(Research)、「創作」(Creation) を 3 つの柱とし、事業を行った。

「学ぶ」機会の創出として行った「手話で創る脚本教室」では、脚本家を招き、基本と実践を行った。「身体表現を生かしたムーブメントワークショップ」では身体を通してコミュニケーションを考える場となった。

「研究」では、「手話による演技メソッド検証のためのワークショップ」を実施し、手話表現に意図的な指導を行うことの効果が認められた。

「創作」として、2018年度からメンバーを選抜して継続している「作品制作ワークショップ」では、作品選定から取り組みを進めた。また、「手話狂言公演」として、2020年 3 月 6 日（金）、7 日（土）に国立能楽堂にて「手話で楽しむ能・手話狂言公演」を開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を防止する政府からの自粛要請により、中止した。

本報告書では、「演劇部門」の各事業の様子やアンケートを担当である廣川麻子が執筆、記載した。

いずれの事業も外部の専門家の協力なくしては成立しない。多大なる尽力に感謝するとともに、ろう者・難聴者の「学びたい」「表現したい」ニーズに十分に応え、今後も継続して環境を整え、実施していきたい。（廣川麻子）

手話で創る脚本教室 Learning

日時：[第 1 回] 2019年 6 月10日　[第 2 回] 6 月25日
会場：トット文化館
講師：[第 1 回] 今井雅子（脚本家）
　　[第 2 回] 早瀬憲太郎（映画監督 / 学習塾早瀬道場塾長）

手話による演技メソッド検証のためのワークショップ Research

日時：[第 1 回] 2019年 8 月21日　[第 2 回] 8 月22日
　　[第 3 回] 2020年 1 月29日
会場：トット文化館
委員：河合依子（全日本ろう者演劇協会会長）
　　木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院 教官）
　　早瀬憲太郎（映画監督 / 学習塾早瀬道場塾長）
　　江副悟史（日本ろう者劇団代表）

身体表現を生かしたムーブメントワークショップ Learning

日時：2019年 6 月19日、6 月26日 [各回完結型]
会場：品川区立中小企業センター レクリエーションホール
講師：小野寺修二（演出家 / カンパニーデラシネラ主宰）

作品制作ワークショップ Creation

日時：2019年 6 月17･18日、2020年 3 月14･15･16･21･22日
　　[全 7 回]
会場：トット文化館
進行・演出：小野寺修二（演出家 / カンパニーデラシネラ主宰）

手話狂言公演 Creation

日時：2020年 3 月6日、3月7日 [全 2 回]（中止）
会場：国立能楽堂

THEATER

手話で創る脚本教室 Learning

日　時　［第１回］2019年６月10日（月）［第２回］６月25日（火）各18:30-21:30
会　場　トット文化館（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　［第１回］13名（ろう者・難聴者）［第２回］11名（ろう者・難聴者）※スタッフ各２名（ろう者・難聴者）

講師（第１回）：

今井 雅子 Masako Imai

広告代理店コピーライターの傍ら脚本家デビュー。主なテレビ作品に連続テレビ小説『てっぱん』、『天使とジャンプ』、『おじゃる丸』、『昔話法廷』（以上 NHK）。主な映画作品に『パコダテ人』、『子ぎつねヘレン』、『嘘八百』。小説、エッセイ、作詞も手がける。

講師（第２回）：

早瀬 憲太郎 Kentaro Hayase

2001年より映像製作に取り組み 2009年劇映画『ゆずり葉』の脚本、2013年ドキュメンタリー映画『生命のことづけ』の脚本を担当。2020年６月公開予定の映画『咲む』の脚本を手話で作成した。

物語を映画や演劇としての作品にする時、まず基本になるものは「脚本」であるが、独特の書式やルールが存在する。聴者は、民間などで実施している脚本教室やシナリオスクールに通い、学ぶことができる。しかし、ろう者の場合、そういった機会に参加するには、手話通訳が必要になる。地域によっては公的派遣制度で「趣味」「カルチャー」「継続性のあるもの」には派遣できないとして、断られてしまうという課題がある。そこで、自分たちのペースで学ぶことができる手話通訳付きの脚本教室を２回にわたって実施した。本企画のコーディネートは、ろう者が脚本を学ぶ必要性を感じていた映画監督の早瀬憲太郎氏に依頼、企画準備を進めた。

１回目は脚本家・今井雅子氏による基本講座、２回目は早瀬氏による手話で創るワークショップとした。会場はいずれもトット文化館にて、手話通訳は２名体制とした。

第１回　基本編「なんで？」と「そんで？」で光らせる石ころ式脚本術

映画、テレビドラマ、アニメなど多数の作品を手がけている脚本家の今井雅子氏に、脚本づくりの基本について１時間、講義いただいた。基本の柱、ト書きやセリフの解説など、わかりやすいイラストをふんだんに盛り込み、アニメーションなどを工夫したパワーポイントは、ろう者にとってはとても理解しやすかったようだ。実は今井氏は手話への理解があり、ろう者との交流も日頃から行っていて、そういった点でも参加者には好評であった。

後半は３つのグループ（１グループあたり４、５名）に分かれ、昔話「桃太郎」のある場面を創り上げた。手話で十分に話し合えたことがよかったようだ。最後に発表を行なったが、さまざまな展開が出て笑いに包まれた時間となった。

参加者からの感想を含めて講座の様子を動画撮影し、Facebookで発信したところ、再生数が847回（2020年１月22日現在）となった。

第２回　実践編「手話で創る脚本」の新たな世界を探る

映画監督の早瀬憲太郎氏の新作映画『咲む』（全日本ろうあ連盟・2020年６月公開予定）で手話脚本を執筆した経験から、手話脚本の可能性についての話からスタート。

イラストを見て物語を作る練習、設定から物語を作り上げる練習、発表したものに対してさらなるアイディアを出し合うなど、まさに実践的なワークショップとなっ

た。第１回で学んだ、脚本の基本をしっかりと参加者が身につけていることが伝わった。

また第１回の講師である今井雅子氏が見学に来られ、終了後は参加者と交流を深めた。現役の脚本家とお話をすることで刺激となったようだ。

第２回の様子の動画も、Facebookで発信し、再生数が649回（2020年1月22日現在）となった。

２回の教室を終えて

今回の企画を開催してみて意外だったのは、「俳優として演じる演劇経験はない、あるいは、演じることに興味はないが、書いてみたい」という思いを持った人の応募が多かったということである。そして、どの人も積極的に物語を作り出そうとしていた。書籍で書き方を学ぶことはできるかもしれないが、やはり現役の脚本家から直接､指導を受けることの意義は大きいと感じた。「桃太郎」という誰もが知っている物語が、みんなで磨き合うことで、こんなにもさまざまな形に変化し、「書く」面白さを感じたようだ。

あわせて、手話で考え、話し合うことができる環境の大切さを感じた。自分の言語でのびのびと発言することで、発想が豊かになる様子を目の当たりにした。本格的に脚本を学ぶ場を継続して作ることで、ろう者・難聴者ならではの脚本が生まれる可能性がある。この取り組みから、新たな芸術作品の芽が育つことを期待したい。

参加者アンケートより（抜粋）

・脚本を作っていく過程がよくわかった。そんなに難しいものではないということも。

・習いたくてもできなかったところ。特にネタ（石）を磨くこと、代案をたくさん作ることが大変勉強になった。

・一つの物語までつなげるための連想ゲーム。どんどんやってもいいんだと思った。無駄な作業は除かなきゃという思い込みがあったが、そうではないと気付いた。

・個人的にシナリオスクールに通ったことがあるが、手話通訳費を自己負担していたので苦しかった。今回のようなWSは本当に嬉しかった。ぜひまた開催してほしい。

・脚本を書くことにそこまで興味がない人でも、自分でイメージを膨らませたり発想力を磨いたりという楽しさを味わえる内容だと思った。

・専門的な言葉は使わず、初歩的段階からだったのでとても分かり易かった。

・仕掛けの作り方（伏線の貼り方）、話の膨らませ方、発想の仕方を学んだ。

THEATER

手話による演技メソッド検証のためのワークショップ Research

日　時　［第１回］2019年８月21日（水）［第２回］８月22日（木）［第３回］2020年１月29日（水）
各 18:30-21:30
会　場　トット文化館（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　［第１回］10名（ろう者・難聴者）［第2回］10名（ろう者・難聴者）［第3回］3名（ろう者・難聴者）※スタッフ各2名（ろう者・難聴者）

委員：

河合　依子
全日本ろう者演劇協会　会長

木村　晴美
国立障害者リハビリテーションセンター学院 教官

早瀬　憲太郎
学習塾早瀬道場　塾長

江副　悟史
日本ろう者劇団　代表

聴者が演技を学ぶ一環として「ボイストレーニング」があるように、ろう者・難聴者として「手話表現トレーニング」が求められる。しかし、現在、日本では系統だったトレーニングプログラムが確立していない。そこで「手話による演技メソッド研究会」を2018年度の事業として立ち上げ、手話による演技メソッドを作成することで、ろう者・難聴者の手話を使った演技スキルの向上を目指す。上記４名の委員により、明晴学園の見学、教師との意見交換などを経て、本年度はプログラム研究を行った。プログラム案を作成し、その効果を検証するため、モニターとして参加者を募集、受講前、受講後で撮影を行い、手話表現がどれだけ向上したかを確認する計3回のワークショップを開催した。

３日間にわたるワークショップの構成

第１回ワークショップでは、はじめに、江副氏による「指のトレーニング」を行った。手を自由に動かせるようになるためのウォーミングアップとしての動きの練習で、「雨」「雲」「波」「風」「木」を表現する。指から手首へと意識を向けた。木村氏による「手話のトレーニング」では、平叙文、否定文、疑問文などを練習。さらに視線の使い方、はり、ゆるみなど手話の文法を整理し、説明を行った。日常的に手話を使うろう者ではあるが、改めて基本を確認する機会となった。引き続き江副氏の指導で、環境映像、CM 映像を見て表現を行った。ある映像を見て、CL（類型辞）、NMM（Non-Manual Markers 非手指標識）などを使って表現する「映像トレーニング」である。暗誦トレーニングとして、手話表現を繰り返しなぞるためのポイントが伝えられた。早瀬氏は、「ノンタン」シリーズ絵本を手話で表現することのポイントを紹介。河合氏は、長年の経験を持つ演劇人の立場からのアドバイスをした。

モデルの手話を模倣する参加者

以上を２日間で行なった。また、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科で開発、利用している手話動画を提供し、第３回の１月29日までの間に、参加者に自習してもらった。

第３回では辞退の連絡が２名、無断欠席が３名と寂しい状況であった。自宅学習を当日まで実施したのは１名、途中までが１名、課題のプリントを無くした人が１名、ただし、自宅学習の課題を表現してもらったところ、自宅学習を行った人はそれなりの成果は出ていた。さらに、表現に関する言語学的指導を行ったあと、もういちど別の教材を使って表現をしてもらったところ、言語学的に適切な表現を行うことができるようになったなど、一定の効果は見られた。

ワークショップをふり返って

当初は日本語から手話への翻訳力を磨くプログラムを２日目に予定していたが、参加者の様子から、手話そのものの表現を磨くことをまず大事にしようということで、割愛した。ろう学校で手話文法を指導してこなかったため、手話文法に則った手話表現を身につけることが難しいということが明らかになった。そのため、手話表現を使った演技スキルを育成する前に、その課題を解決しなければならないということが明らかになった。

今後、「手話による演技メソッド」を確立するためには、まず手話文法の基本から指導を始めることが肝要である。映像に出している手話表現をなぞるだけではなく、文法としての知識を持った上で練習をすることが大切であるということを確認した。

これらを踏まえ、第３回のワークショップの翌日に開催した委員会では、今後に向けて以下の点を確認した。

・目的に応じた細かい教材の作成（手話表現、映像向け、舞台向け）

・言語学的指導の積極的な導入

・手話表現スキルを客観的に見極めるための評価を作成

上記項目を含めることで、本企画の当初の目標である「手話による演技メソッド」プログラムの開発が可能となると考える。テレビや映画、舞台などにおいて手話表現者のニーズが高まっている現在、手話言語学的に適切であり、より良い手話表現ができる人材の育成が急務である。

第１回で手の動きの大きさ、スピードなどを指導する木村氏

第３回で発表する参加者

参加者アンケートより（抜粋）

・自分に足りないところ（CL、NMM）に気づけたこと

・手話の基本ができていないので、とても難しく感じたが、色々な角度から話をいただけたので、より客観的に手話について考えるきっかけとなった。

・「見たままをやる」ということが難しかった。聴者にとっての音読が手話の場合はこうなるのかとなんとなくわかった。

・江副さんが表現している横で、木村さんが言語学の視点で解説するスタイルだったので、話の内容を理解できた。

・内容レベルを下げてくれて助かった。どこでもやっていない手話の基本の基本から一つひとつ丁寧に教えていただいたおかげで、映像を手話で表現するときのポイントがわかってきた。

THEATER

身体表現を生かしたムーブメントワークショップ Learning

日　時　2019年6月19日（水）、6月26日（水）各18:30〜21:00［各回完結型］
会　場　品川区立中小企業センター レクリエーションホール（東京都品川区西品川1-28-3）
参加人数　6月19日：23名（ろう者・難聴者10名/聴者13名）、6月26日：25名（ろう者・難聴者6名/聴者19名）※スタッフ 各1名（ろう者）

講師：

小野寺 修二 Shuji Onodera

演出家。カンパニーデラシネラ主宰。日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。1995年〜2006年、パフォーマンスシアター水と油にて活動。その後文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として1年間フランスに滞在。帰国後、カンパニーデラシネラを立ち上げる。マイムの動きをベースとした独自の演出で世代を超えた注目を集めている。第3回日本ダンスフォーラム賞受賞。第18回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。近年の主な演出作品は現代能楽集Ⅸ『竹取』（2018年/世田谷シアタートラム他）、横浜ダンスコレクション2019『見立てる』（2019年/横浜のげシャーレ）等。

身体表現の楽しさを伝えることに定評のある小野寺修二氏（カンパニーデラシネラ）によるワークショップを開催。2017年（12月）、2018年（8月）にも同ワークショップを実施し、好評であったため、今年も開催する運びとなった。ダンス経験の有無を一切問わず、ろう者・難聴者、また彼らとともに身体を動かしたい人を対象に募集を行い、それぞれ1回完結で行った。

身体を動かすには広いスペースが必要となるため、トット文化館から徒歩10分の品川区立中小企業センター レクリエーションホールを借りて開催し、手話通訳2名が交代で担当した。

ワークショップは2回とも同じ内容で進行した。1人で動いたり、2人で、また3人、4人、5人、最後には10人が一つの短い作品を、音を使わずに身体から生まれるリズムを探しながら創り上げた。手話を使う人と使わない人が同じ組になったが、話し合いの過程では手話通訳を極力使わず、お互いに伝わる方法を探した。手を繋いだり、背中を合わせたりする身体コミュニケーションが、言語を超えた人との関係づくりにつながることを確認する時間となった。

参加者アンケートより（抜粋）

・とても前向きなワークショップで参加していて気持ちが良かった。一人からペア、全員と色々なパターンのつながり、見る、真似るということがとても楽しかった。

・身体を明確に使う（体の向き、触るときの強さなど）ことへの意識が強くなった。

・普段の生活の中で、人の身体に触れる、触れられる機会は意外と少ない。そこから生まれる対話を楽しむ、その入り口に立ったような気がする。

・聞こえない方とはじめてやったが、伝わること伝わらないこと、いろいろ体験できた。言語がなくてもなくても一緒に作品を作れた。

・ろう者と聴者の調整の仕方が違うということを発見できた。

THEATER

作品制作ワークショップ Creation

日　時　2019年6月17・18日・2020年3月14・15・16・21・22日［全7回・計32時間］
会　場　トット文化館（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　9名（ろう者5名 / 聴者4名）　※スタッフ1名（ろう者）

進行・演出：**小野寺 修二** Shuji Onodera →プロフィールは p29 に掲載

人形劇と身体表現の新たな地平を目指し、さまざまな可能性を探っていく共同創作として、日本ろう者劇団、デフ・パペットシアター・ひとみ、カンパニーデラシネラが2018年度から取り組んでいる長期プロジェクト。日本ろう者劇団から3名（鈴まみ氏、數見陽子氏、中江央氏）、デフ・パペットシアター・ひとみから2名（増子仁美氏、榎本トオル氏）、一般公募のアーティストである雫境氏（ろうのダンサー）、福島梓氏（ダンサー）、高橋美帆氏（俳優）、カンパニーデラシネラから崎山莉奈氏の9名が参加している。

初年度の2018年度は、小野寺氏の特徴的な身体表現を学ぶワークショップを行った。

2019年度は、具体的な作品を作ることを目標としたワークショップを実施。演出は小野寺修二氏が行い、アシスタントとして藤田桃子氏（カンパニーデラシネラ）も加わった。また、イプセン原作の『野鴨』をもとにしたテキスト提供を山口茜氏に依頼した。

ワークショップ開催に先立って

ワークショップが始まる前の5月9日に、現代人形劇センターにて、デフ・パペットシアター・ひとみの『河の童－かわのわっぱ－』公演稽古見学および、人形劇についてのレクチャーを行った。また5月20日に同会場で小野寺氏、藤田氏、山口氏、デフ・パペットシアター・ひとみメンバー、日本ろう者劇団メンバーとともにミーティングを行った。

7日間にわたるワークショップ

いよいよワークショップがスタート。6月は『野鴨』の一場面を手話で表出することに挑戦した。手話と声、そして身体表現をどのように組み合わせるか、時間をかけて議論した。一般公募した聴者であるダンサー2名は手話を知らないという条件のもと、どこまで手話のセリフの正確な表現を求めるのか、さまざまな可能性を探った2日間となった。

3月は、身体表現で伝えることを再び探求する5日間となった。6月に作った手話の台詞は一旦置き、登場人物同士の関係性を身体の動きで説明したり、台詞のやり取りを視線、指差し、表情、身体を動かすタイミングで表現するなど、さまざまな可能性を試した。小野寺氏の演出手法は、一方的に振り付けを行うのではなくイメージを丁寧に伝え、メンバーと話し合いながら創り上げることを特徴とするため、じっくりと作品に取り組む時間となった。一つ一つの動きに意味を見出し、細かいタイミングを重視するため、同じ場面を何度も確認することで、メンバーの身体がどんどん変わっていった。

手話通訳についての意義

一般的に通訳は15分交代で行うことで、通訳の質を保ち、通訳者自身の健康を守る必要がある。そのため、通常は2名交代で行っているが、今回は手話通訳の意見をふまえ、3名体制とした。理由は、各パートに分かれて練習することがあり、その時は手話通訳もそれぞれにつくことがある。休憩を取るタイミングを確保するため、

３名体制とする工夫を行った。経費はかかるが、質を保つためには必要であり、手話を使う人と使わない人がともに創作活動を行う上で避けられない課題である。

今回はメンバーから積極的に手話通訳者に立ち位置を要望するなど、より良い創作環境を作るための工夫を行うことができた。

発表会および今後に向けて

3月22日に予定されていた発表会は、コロナ感染拡大防止の観点から一般向けに観覧の呼びかけは行わず、関係者に限定した。また作品を披露するショーイングではなく１時間の「稽古公開」という形とし、コミュニケーションを重ねながら作品が深まっていく過程を見学者に見ていただいた。最終的に20分ほどのまとまりのある作品ができた。

昨今の演劇界では、完成した作品を上演するだけでなく、稽古の様子を公開する「ワーク・イン・プログレス」を行う例が出てきている。これは荒削りのまま観客に見てもらい、観客と意見交換を行うことで作品づくりに反映させ、深めていく手法である。

今回の発表会は「ワーク・イン・プログレス」として行ったものである。研修のため来日中のフランス人ろう学生をはじめ、日本ろう者劇団代表、顧問、劇場関係者からの積極的な質問や、コメントを次の通りいただくことができた。

・手話でもなく、マイムでもない、新たな可能性を感じる表現になっていた

・表情のある人とない人がいるが、どのような意味があるのか

長く関わることでメンバー間の信頼が深まり、コミュニケーションがスムーズにいくようになってきた。質の高い作品づくりをめざし、2020年度は４月からかなりの時間をかけて稽古を行い、７月にシアターカイ（東京・両国）にてワークインプログレスを実施する。観客からの意見をもとにブラッシュアップし、2021年度に本公演を目指す。

育成×手話×芸術プロジェクト

美術部門

＜美術部門のロゴマークについて＞
日本手話で「美術」を表しています（ロゴデザイン：飯島愛美）

ART

美術部門　全体概要　Overview

育成×手話×芸術プロジェクト
「アートを通して考える」

第１回　アートを開く　Lecture
アートとコミュニケーションについて考える

日　時：2019年９月29日
会　場：トット文化館
ゲスト：八巻香澄（東京都現代美術館学芸員）
　　伊藤達矢（東京藝術大学美術学部特任准教授）

第２回　アートを体験する　Tour
手話を通して展覧会「MOT サテライト 2019 ひろがる地図」を体験する

日　時：2019年10月20日
会　場：東京都現代美術館
ガイド：八巻香澄（同上）

スペシャル回　Lecture
イギリスのミュージアムにおける手話による鑑賞プログラム

イギリスの美術館での手話ツアーの歴史や現状を知る

日　時：2019年11月12日
会　場：東京藝術大学
ゲスト：ジョン・ウィルソン（手話ツアーガイド）

第３回　アートと身体　Lecture
映像とダンスを通した身体と表現について語る

日　時：2019年11月23日
会　場：トット文化館
ゲスト：百瀬文（アーティスト／映像作家）
　　南雲麻衣（アートコーディネーター／アーティスト）

第４回　感覚の境界を超える　Film
ロードムービー『TOTA』の上映と、監督と出演者によるアフタートーク

日　時：2019年12月13日
会　場：象の鼻テラス
ゲスト：八幡亜樹（映像作家）
　　雫境 ／ DAKEI（舞踏家）

第５回　アートとマイノリティ　Lecture
アートを通して少数派の文化を伝える

日　時：2019年12月21日
会　場：トット文化館
ゲスト：金仁淑（アーティスト）
　　牧原依里（映画作家）

企画・モデレーター：荒木夏実（東京藝術大学美術学部准教授）

美術部門では、2019年９月末から12月の３ヶ月にわたり、「アートを通して考える」という、全６回の企画を開催した。言語、人種、政治、障害などあらゆる境界を超える力を持つアートの視点から、視覚言語の世界を生きる「ろう」にフォーカスすべく、「ゴー・ビトゥイーンズ展：こどもを通して見る世界」や「ディン・Q・レ展：明日への記憶」など、境界をテーマにキュレーションを行ってきた荒木夏実氏をモデレーターにお招きした。「聴者の立場から考えた偏ったプログラムにしたくない」という荒木氏の方針に基づき、ちらしの文言や講師のセレクションなどについて、ろう者スタッフである牧原依里の意見を反映させながら全体を構成していった。その際、ろう者と聴者のアーティストやエデュケーターが、自身の活動や考えについて語り、お互いに異なる感覚を通して意見交換を交わす場を設ける工夫をした。ろう者・聴者から捉える互いの気づきや視点のズレ、マジョリティとマイノリティの構造など、このシリーズを通して、共生について考えるための様々な発見があった。

本報告書では、第１回から第５回とスペシャル回の計６回のレポートを、ろう・難聴の当事者であるスタッフ（管野奈津美・牧原依里・森岡見帆）の視点でまとめたものを記名原稿として掲載する。文字を持たない言語である手話を使用するろう・難聴者は、普段このような執筆をする機会がないため３人とも苦戦したが、日本語として言語化することによって、自分たちがどのように世界を捉えているかを見つめ直す良い経験となった。ろう者と聴者を繋ぐ日本語は、聴文化から生まれた日本語であり、ろう文化の中にある日本語ではないのだということを、聴者との間に交わされるやりとりにて痛感し、思索したことも特記しておきたい。

プログラムを通して、日本語と日本手話という異なる言語、そして言語と非言語の間を往復する作業はまさにアート体験そのものであった。このような貴重な機会を与えてくれた荒木夏実氏、登壇いただいたゲストの方々、そして場を共有し、一緒に議論をした参加者に感謝の意を表したい。（牧原依里）

第1回　アートを開く　Lecture

日　時　2019年9月29日（日）13:00-15:30
会　場　トット文化館 2階（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　32名（ろう者・難聴者 4名 / 聴者 28名）※スタッフ 2名（ろう者・難聴者 2名）

Guest：

八巻 香澄　Kasumi Yamaki

東京都現代美術館学芸員。東京都庭園美術館でラーニングプログラムを担当し、「五感と想像力で歩く建築ツアー」、「あーととあそぶにわ」などを実施。特性の違う人達による対話を生み出すプログラムに興味を持つ。2018年より現職。

Guest：

伊藤 達矢　Tatsuya Ito

東京藝術大学美術学部特任准教授。東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」では、プロジェクトマネージャを務める。共著に『美術館と大学と市民がつくる ソーシャルデザインプロジェクト』（青幻舎）。

本プログラム第1回では、東京都現代美術館学芸員の八巻香澄氏と東京藝術大学の伊藤達矢氏のお二人に、満員御礼の中、手話にまつわる魅力的な取り組みについてお話しいただいた。

クリエイティブな体験を目指した手話プログラム

八巻氏からは、これまでの美術館において、「美術と手話プロジェクト」[1]と協働・実施した手話プログラムを紹介していただいた。東京都庭園美術館「ガレの庭」展（2016年）で開催されたワークショップ「もしもガレがガラス職人に手話で指示したとしたら」では、「アプリカッション」「マルケットリー」「アンテルカレール」などのガラス技法の専門用語の手話表現を探るという試みを行った。CL表現（Classifier［クラシファイアー・類辞］の略で、手話特有の表現方法とされる）を生かし、手の動きの大小、強弱や遅速、位置などを工夫しながら、参加者同士で議論を重ねて作り上げたという内容であった。これまでも手話通訳をつけたギャラリーツアーなどは多く行われているが、このワークショップの特徴は、手話ユーザーの協力を得られた点、手話を用いたクリエイティブな体験を目指した点、この二つにあるといえよう。手話を全く知らない聴者にとっては手話やろう者のことを知るきっかけになるとともに、手話ユーザーにとってもこれまで気づかなかった手話の一面や魅力に気づく機会になる。手話ユーザーと手話を知らない人がともに、手話というツールを通して視覚的な表現に向けた対話の過程の中で、互いに概念に対する理解や鑑賞を深めていくという新たなアプローチになっている。

しかし、手話は複雑な言語体系を持つ言語のため、簡単に習得できるものではない。そこで紹介されているのは手話の一面であり、どちらかといえばCL表現から思いついたものだが、完全に手話であるとは言い難い。手話を作るという過程を通して、視覚言語としての手話を体験してもらうという面では素晴らしい試みだが、一方で、聴者にこれが「手話」なんだと誤解され、間違った認識を広める恐れもあるのではないかと個人的には危惧も抱いた。もしくは手話の知識に長けたファシリテーター、あるいはろう者がファシリテーターとなり、対象グループを①ろう者・手話がわかる聴者のみ、②手話を知らない聴者のみ、③ろう者と手話を知らない聴者とそれぞれカテゴリーを分けて実施すれば、より深みのある内容になるのではないか。また、ろう者ファシリテーターによる手話表現を鑑賞し、音声や文字以外の視覚情報でも技法を伝えられるという、別視点からの概念の理解方法を提供することもできるのではないかとも感じた。

コミュニケーションの可能性を広げた「とびラボ」

伊藤氏からは東京都美術館×東京藝術大学の「とびらプロジェクト」について紹介いただいた。上野公園内にある東京都美術館と東京藝術大学が目指すのは、アートを市民の社会的共有財産として捉え、アートを介して多

1　美術と手話プロジェクト http://art-sign.ableart.org/

様な人々と共に新しい価値を育み、その価値を社会に届けることにある。その理念に従い、現在、職業・性別・障害・年齢などを問わず、様々なバックグラウンドをもつ約140人の一般のアートコミュニケータ「とびラー」が所属しており、「とびラボ」と呼ばれる「この指止まれ」方式で自発的にプロジェクトごとにチームを結成し、独自の企画を実施・発信している。その中で、手話学習者や手話通訳者がアートコミュケータとして集結したことがきっかけで、美術館で耳の聞こえない人と聞こえる人が、作品について直接コミュニケーションをする試みが始まり、「ボッティチェリ・鑑賞・香り〜聞こえない方と聞こえる方のサイレントコミュニケーション〜」(2016年)のワークショップ展開につながった例がある。五感のうち、嗅覚を生かした「香り」のツールを駆使して作品の感想を共有することを思いつき、当事者の意見を取り入れながらプログラムを編成した。ワークショップの最初と最後だけ手話通訳をつけ、メインのワークでは聞こえる人は発話を禁止、聞こえない人は手話を禁止された中で、作品と香りを結びつけ、筆談のみを通して、個々が感じたことの共通点や違いを探っていった。

お互いの感覚の共通点や違いを共有する空間を作る試みは、美術館における新たなコミュニケーションの可能性を広げた。アートコミュニケータの役割は声の大小や立場の高低に関わらず、人々が安心してフラットで話せる環境を作ることであり、当事者の意見も取り入れ、対話によってワークショップを作り上げるプロセスを重視する「とびらプロジェクト」だからこそ、実現できた試みであるといえよう。

求められる美術館のアプローチとは

最後のディスカッションでは、美術館のそれらの取り組みがろう者側に広く知られていないためにろう者の集客が難しいこと、そして当事者性についても触れられた。美術館側の悩みとしては、障害のある方に向けての対応を何か取り入れると、それに対してのコメントはなく「なぜもっとできないのか」という否定的なご意見

をいただくことが多いということであった。「どうしても聴者には聞こえない人のことがわからない、ろう者が何を求めているのか理解できないからこそ、どうしたらいいのか、何を求めているのかをフラットな関係で対話したい」と八巻氏は語る。美術館としては、ろう者からの要望がない限り、動くことができない。しかし、ろう者は我々のことを考えてくれないと怒りさえ感じて、何かするたびに本当はもっとできるはずだと期待するあまり、それをぶつけてしまう。その認識のズレが大きく、分断を生んでしまっているのかもしれない。このような事態を解決していくためにも、その「怒り」が生み出されるプロセスを分析するとともに、ろう者側も自分たちが求めていることを「怒り」ではなくより建設的なアプローチで発信し、美術館側の求める対話に参加していく必要があると私は考える。スタッフ同士でも、ろう者側もアプローチの仕方がわからない部分もあるのではないかという意見が出された。ろう者が育った背景にもよるが、ろう教育において、マジョリティに自分の立場をどう理解してもらうのか、どのように要望を出していくか、考える機会がなかなか与えられないという環境の問題もある。自戒も込めて、能動的な働きかけや協働の方法について、我々も学んでいく必要があると痛感した。

今回、ご紹介いただいた手話プログラムを含めた取り組みは大変魅力的であるが、ろう者の参加者をさらに増やしていくためには、美術の知識にも長けているろう者のファシリテーターやエデュケーターを育成していく必要があるのではないか。ファシリテーターは手話が堪能であることはもちろん、参加者とダイレクトにやり取りができ、上手く盛り上げ、リピーター集客につなげるといった力量が求められるだろう。様々なプログラムに当事者が能動的に関わっていく、また様々なろう者・難聴者の姿を提示していくことが美術館との新しい協働への一歩になるのではないか。「アートについて考える」企画を通して、様々な専門家やアーティストと議論を重ねることは、当事者の能動的な参加や協働に向けて考える良い機会となった。(管野奈津美)

第2回　アートを体験する　Tour

日　時　2019年10月20日（日）13:00-15:00
会　場　東京都現代美術館 地下2階「MOT サテライト 2019」展示室（東京都江東区三好 4-1-1）
参加人数　8名（ろう者・難聴者2名 / 聴者6名）※スタッフ3名（ろう者・難聴者3名）

Guide：　八巻 香澄　Kasumi Yamaki　→プロフィールは p34 に掲載

東京都現代美術館で開催された地図をテーマにした展覧会「MOT サテライト 2019 広がる地図」[1] にて、学芸員の八巻香澄氏による、手話通訳者を介したガイドツアーを行った。参加者は8名のうち、ろう者・難聴者2名、聴者6名。

最初の1時間は今和泉隆行の「空想地図」や視覚以外の感覚で表現する光島貴之の作品群など、八巻氏の解説を受けながら作品を実際に見て回った。その後に、参加者たち全員にどの作品が気になったか2～3作品を紙に書いて提出してもらった。今回は投票数が多かったマリー・コリー・マーチ[2]「アイデンティティ・タペストリー」の作品を取り上げて、参加者が感じたことを共有し合う約1時間のディスカッションを行った。

参加型作品　「アイデンティティ・タペストリー」

「アイデンティティ・タペストリー」は関わってもらうことで完成する作品だ。参加者が一玉の毛糸を持ち、約12メートルの巨大な壁に配置されている200個もの質問が書かれたプレートにかけていくのだ。「私は楽天的だ」「私は家族を愛している」などという質問にYESであれば糸をかけ、NOであればかけない。そうして左端から右端に向かってスタートした全ての質問に答えていくことで、様々な人たちがかけていった毛糸が可視化され、一つの作品として出来上がるインタラクティブな作品となっている（私たちが参加した時は毛糸がもうなくなっていたため、鑑賞のみになった）。[3]

ディスカッションでは、「なぜそのような位置に質問を配置したのか」「その質問にしたのか」にフォーカスされた。「配置に関しては右端にある最後の方の質問が『自分は幸せだ』『自分に満足している』など最終的にハッピーで終わるよう作られている」、また「『戦争を経験したことがある』など珍しい経験や特性を持つ人をあえて上下に設置しているように感じた」、など参加者は各々に感じ方があった様子。質問内容に関しては「私は女性である」「私は男性である」というような質問が

1　東京都現代美術館（MOT）の活動を地域にも拡張し、作品鑑賞とまち歩きを通して、美術館周辺の「まち＝地域」の魅力を再発見するシリーズ企画。https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/mot-satellite-2019/

2　1977年生まれ、カリフォルニア在住。布や糸を使った参加型インスタレーションやパフォーマンスを行うアーティスト。オレンジカウンティ現代美術センター、マージョリー・バリック美術館などで展示を行っている。http://www.marymarch.com/about.php

3　東京都美術館では、1日20人限定で2週間程度かけて完成された。

設置されていることに戸惑いと違和感を持ったという声や、「ここで生まれた」という質問が日本なのかこの地域を指すのかわからなかったという意見も出た。

また１本の糸を辿ってみると、「私は子どもである」と糸をかけてあるにもかかわらず、「戦争を経験した」とかけてあることに気づいたという例もあった。このことから「子ども」というのがその人にとっての身体的な特徴なのか精神的な状態なのか、「戦争」がその人にとっての実際の経験なのか、心や現実のなかにあるイメージなのか、人によって解釈が異なっていくということがわかる。

ディスカッションの途中で「アイデンティティが確立された人の糸はほぼ真ん中に集まっているように思った」といった発言があり、それに対して、「アイデンティティは確立と崩壊を繰り返していくもの」という反論があった。その流れで「そもそもアイデンティティの定義とは？」と議論が展開した。コーディネーター・荒木夏実氏より「アイデンティティという固有名詞はもともと日本にはなく輸入されてきた言葉。自己同一性という、馴染みがない日本語に訳されている。外国では人種問題などが日常にあるため、アイデンティティに対しての意識が一人ひとり高いが、日本ではどうか？」と参加者たちに問いかけられた。

その問いに対して、一人ひとり様々な意見が出た。例えば「アイデンティティ・タペストリー」にあった質問「自然が好きだ」という質問に圧倒的に糸がかかっていたのに「宗教を持っている」という質問にはあまり糸がかかっていなかったことから、日本では自然が宗教的意味合いに近く、個人よりも全体という感覚を大事する文化を持ち、このタペストリーは日本そのもののアイデンティティでもあるのではないかという意見も出た。

八巻氏によると、実際に作者はこの作品をアメリカのラスベガスやサンフランシスコ、スイスなどで展示しており、日本で 13 番目の展示になるという。例えばオリジナルの質問の中には「銃を持っている」という項目があったが日本ではあえて無くすなど、作者はその国や地方に合わせて質問の内容や配置などを調整しているとのことだった。

ろう者・難聴者にとってのアイデンティティ

今回のディスカッションでは展開されなかったが、実は生まれた時から周りと異なるがゆえに早い段階で自らのアイデンティティを自覚せざるを得ないろう者・難聴者にとってこの「アイデンティティ」は、自己形成していくにあたって不可欠なテーマの一つであるように思う。

実際、「母語は日本語ではない」という質問が設置されていたことに対し、ろう者のスタッフの一人から自分は当てはまるのか戸惑ってしまったという声があがった。このスタッフは、親が聴者で小さい時からろう学校で口話教育を受け、成長してから手話を習得したろう者である。ろう者・難聴者の親は90%が聴者であり、彼らは音声言語に囲まれ、手話を自然に獲得する機会がないまま育つケースが多い。同時に、ろう学校においても口話教育が一辺倒に行われ、音声言語の理解が困難である彼らに手話という視覚言語を与えない、いわゆる言語剥奪という時代が2000年代まで当たり前のように行われていた。このように音声言語と視覚言語両方においても、言語の習得が十分ではなく、彼らのアイデンティティ形成にも大きな影響を及ぼしてしまっている。彼らが大人になってようやく獲得できた手話は母語なのか否かという問いが、彼らにとって未だに永遠に続く問いとして突きつけられている。

そんな彼らにとってアイデンティティというテーマは聴者の日本人と比べて身近な存在にある。ある程度音声を活用しても、ろう者としてのアイデンティティを持っているという意味で「ろう者」として名乗る難聴者もいれば、その逆もいる。他に、ろう文化や手話を最近知ったため、この手話ツアーではどういうスタンスで意見を言えば良いのか戸惑ったという人工内耳装用者もいた。

このように、見た目ではわからない、環境や育ちなどからくる幅広いグラデーションがろう者・難聴者の世界に存在している。

今回は作品に対して幅広い自由な意見を出し合うことが目的だったため、ろう者・聴者のアイデンティティについてはセンシティブな問題であるだけに深く言及していけないと遠慮したろう者・難聴者もいたようだった。

そんな中で、教育に携わるろう者から、「聴者と違い、社会に出るとどういう配慮が必要なのか自ら説明しなければいけないろう・難聴の学生にとっても、『自分は何者なのか』を考えさせなければいけない。この作品は自分との対話を促すきっかけとして気軽に取り組めるのではないか」という感想が出た。思春期の子にとっては、言葉を介すると直接的すぎてしまうアイデンティティについての問いかけが、芸術という形だと受け入れられやすく、自分への発見や再認識のきっかけにもなりうる。芸術はあらゆる面で無意識的に一人ひとりの潜在意識にアクセスできる力がある。

この「アイデンティティ・タペストリー」はろう者・難聴者にとっても相性がよい作品である。例えば、彼らの背景を把握している人がファシリテーターとして入り、彼らと作品を繋げていく、またこの作品への参加をろう者・難聴者・人工内耳装用者に限定してみるなど、一工夫を凝らすことで今回とはまた違った側面から、この作品を掘り下げていくことが可能だと考えている。

手話ツアーの後に知った情報だが、作者のマリー・コリー・マーチは2017年にCFS/ME（慢性疲労症候群／筋痛性脳脊髄炎）に罹患し、障害者になっていた。また社会学者と文化人類者の親を持ち、学生の時からハイコンテクトとローコンテクト、アートとクラフト、女性と男性など様々な定義の「間」を表現してきたとのことだった。つまり質問の仕方も作者によって意図的になされたことがわかる。

生い立ちや制作の意図など、作者のスタンスを共有することで、参加者とのディスカッションに厚みを持たせる方法もある。またろう者は解説の時でも相手との対話を好む傾向がある。手話という言語で心地よい環境を第一優先にするならば、ろう者・難聴者のみに参加者を限定し、作品について深く学ぶことも可能だろう。

今回のように、ろう・難聴者にとって身近にあるテーマ（マイノリティ / 文化 / 言語 / 抑圧・被抑圧など）をメインに作品を通して聴者、ろう者・難聴者が意見を共有していく内容も有意義だ。様々なレベルやテーマに応じてプログラムを組んでいくことで、手話ツアーを通して美術館に訪れることの面白さがろう者・難聴者の間に広まるかもしれない。またろう者・難聴者にしか持ち得ない感覚や視点、新しい世界の発見を来場者たちに提供できる可能性を感じた。

その実現のためには、ろう者・難聴者当事者が美術館とともに最初の段階から一緒にプログラムを考えて取り組んでいく必要があり、そのための体制が今後の課題になるだろう。（牧原依里）

スペシャル回 Lecture

イギリスのミュージアムにおける手話による鑑賞プログラム

日　時　2019年11月12日（火）18:30-20:00
会　場　東京藝術大学美術学部 中央棟 2 階第 3 講義室（東京都台東区上野公園 12-8）
参加人数　87名（ろう者・難聴者 15名 / 聴者 72名）※スタッフ 6 名（ろう者・難聴者 3 名 / 聴者 3 名）
共　催　Diversity on the Arts Project

Guest：

ジョン・ウィルソン John Wilson

ろう芸術の実践者、俳優、手話詩人、パフォーマーとして多岐にわたる分野で活躍している。 テート・ナショナルギャラリー、ナショナルポートレイトギャラリーなどイギリスのさまざまなミュージアムでイギリス手話ガイドを務める。

イギリスでろう者ガイドとして活躍するジョン・ウィルソン氏より、イギリスのミュージアムにおける手話ツアーの歴史と発展、ろう者ガイドの育成方法や現状などについて話を伺った。ウィルソン氏はろう者の立場から手話による美術鑑賞ツアー・プログラムを企画・実施し、ロンドンの博物館や美術館でのツアーガイドとして20年以上の経験を持つ。2017年からは王立芸術アカデミーでイギリス手話ツアーのコーディネートを務めた。

イギリスにおけるろう者のガイドの育成

1980年代、イギリス各地でろう者が集うコミュニティの場としてデフクラブ（ろう者クラブ）が運営されていた。ウィルソン氏もイギリスに数多くあるろう者クラブの一つ「66クラブ」の運営に携わり、様々な娯楽を提供する中でロンドン市警察博物館、ハイゲイト墓地などの手話ツアーを企画していた。当時はガイドもおらず、ろう者同士がそれぞれ知っている知識を披露し合って共有する程度だったという。デフクラブの衰退とともに、手話ツアーが1980年代から90年代に発展し、美術館が手話によるツアーを企画するようになった。しかし手話ができる聴者や手話通訳者による英語対応手話[1]で行われたため、ろう者にとって内容の把握がし難いものであった。ろう者のガイドも出てきたが、英語対応手話が使用され、十分な内容とはいえなかった。

やがて「テート手話アートプロジェクト」として、「ろう者」による「イギリス手話」のガイドの育成が本格的に始まった。ろう者自身がガイドを務めることを目的とし、美術館の知識を習得するコースが開設された。参加者は興味を持った作品をリサーチし、手話で発表し合い、手話表現の工夫について議論を重ねた。さらに、「Museums and Art Galleries in the Capital（MAGIC: 首都の博物館と美術館の略称）」という団体が政府と交渉して宝くじによる基金を立ち上げ、それをもとにろう者のコーディネーターを雇用し、各施設のサービス改善に向けて、ろう者・難聴者からのフィードバックを収集し、運営に反映させた（現在は解散）。

現在は、ろう者を対象としたツアーが以下の 4 パターン行われている。

①ろう者が通訳なしに手話のみで解説するツアー（対象：ろう者のみのグループまたは手話を理解する人々）
②ろう者ガイドが手話で解説し、手話通訳者がそれを読み取って通訳するツアー（対象：ろう者と聴者混合グループ）
③ろう者もしくは聴者ガイドに通訳とリップスピーカー（唇の動きを読ませる人）がつくツアー、唇を読む読話は手話ユーザーではない難聴者にとってわかりやす

1　英語の文法や語順に手話単語を当てはめた手話の一種。ろう者が使用するイギリス手話の文法は英語と異なるため音声併用は不可能だが、英語対応手話だと可能である。ただし言語としては不完全のため、言語学の世界では手話でなく音声言語の一種とみなされている。現在は難聴者や中途失聴者など英語を主な母語とする人に対してコミュニケーションツールの一つとして使われる。日本にも「日本語対応手話（手指日本語）」がある一方、フランスではフランス語対応手話の概念がないなど、国によって異なる。

い（唇の動きと手話を混ぜて使用する）ため、ろう者と難聴者が同時にツアーを受けることができる（対象：ろう者・難聴者）

④聴者のガイドが英語音声で解説を行い、手話通訳がつく（かつてほとんどの機関で行われていたパターン、対象：ろう者と聴者混合グループ）

他には、「Palantype」のソフトウェアを使用して話者の言葉を文字化してスクリーンに投影する方法もあり、その他にも、マルチメディアパネル、手話動画または英語の字幕を見ることのできるディスプレイなども用意されている。

現在、ろうガイドはイギリス全土に広まり、イングランド、スコットランド、ウェールズにおいてもろうガイドが活躍している。「Deaf Tours and BSL Talks UK」というFacebookページに投稿されている各地の手話ツアーの情報に気軽にアクセスすることができる（他にもDeaf-led BSL talksなどのFacebookページがある）。

ろう者ガイドの資格条件はなく、手話ができて意欲があれば誰でも応募できる。しかし聴者によるガイドや手話通訳がつくツアーにろう者は集まりにくい。ろう者の集客力アップを図るためにも、ミュージアムはろう者ガイドを雇用するようになった。ろう者ガイドのメリットとして、ろう者の歴史やエピソードなどろう者を惹きつけるストーリーを練って、参加者の心を掴むことができる点がある。当時のろう者の生活に触れることによって、聴者ガイドや学芸員も新しい知識を得ることができる。

ウィルソン氏の話を聞いていて興味を持ったのは、古城での手話ツアーで、ガイドが17世紀の衣装を着て、当時の古い手話を使って案内するという例だ（音声イギリス英語の変遷と同様、手話も当然、年配の手話と若い人の手話の表現が異なるなど言語変化が起きている）。このように、一般的な美術史にろう者の視点を取り入れ、美術館の知識に新たな風を吹き込むことで、館の活性化やマイノリティの積極的な参加に一役を買っている。

ろう者によるガイドの必要性

質疑応答の中でウィルソン氏が「美術の専門用語などを表す新たな手話を聴者が作ること」については反対だと述べたことも印象に残った。音声言語に当てはめた手話になってしまうと、ろう者が読み取りにくく違和感を持つこともある。手話は複雑な言語体系を持つ言語であるからこそ、ろう当事者の意見や言語学的な知識も踏まえた上で慎重に進める必要がある。そのようなことへの理解を、ろう者から聴者に求める必要があるだろう。

「美術の知識を得るために聴者のツアーや情報を参考にしたり真似たりするのか」という質問に対しては、「聴者（マジョリティ）の演劇だって大抵は本から模倣している、なぜ模倣した部分はあるかと聞くのかわからない」と回答していた。私自身も一般的に美術館で行われているツアーと同じ内容、情報量をろう者にも伝わるようにしてほしい、聴者と同じ情報量をもたなければ同じスタートラインに立てないという思い込みがあったが、ろう者の視点から美術の歴史を見ていくことの可能性を感じた。17世紀の古い手話を使用する、ろう者の歴史も解説に含めるなどの試みは、ろう者の視点を取り入れる上で非常に興味深い。

また、「美術の知識を持つ専門的な手話通訳の養成はどのように行ったのか」という質問が出たが、質問の意図が伝わらなかったようで、意思疎通に時間がかかった。日本において手話通訳は、専業主婦を通訳者として養成したコミュニティ通訳が発端である。長い間、地域のろう者が講師を務め、地域主導で養成が進められてきた。さらに医療やアカデミックな専門性の高い通訳は、ろう当事者が大学や機関で養成講座を開いてきた。そのような背景ゆえに参加者からも質問が出たのだが、ウィルソン氏は「イギリスにおける手話通訳養成において、美術館に関する専門的な知識も勉強できるプログラムが当初から含まれている」と説明し、ウィルソン氏自身は手話通訳養成に関わったことがないという。イギリスの手話通訳養成プログラムや、美術館のプログラムに関わる手話通訳者の養成・コーディネートの詳細についても今回関心を持った。

日本における美術館では、公式な行事としてろう者がガイドを務めることはごく稀で、学芸員などの聴者ガイドに手話通訳をつけるパターンがほとんどであろう。私自身もギャラリーツアーに手話通訳がついた企画に参加したことがあるが、日本語対応手話である上に、通訳者自身も十分な専門知識を持っていないように感じた。美

術の知識に長けた手話通訳の養成も急務であろう。

イギリスにおいて当事者がどのように動き、手話ツアーに対する需要が高まったのかなどについてより詳しく聞くことができず残念だったが、「集客力を高めるならば、ろう者ガイドの方がいい」という話を聞き、ろう者によるガイドの意義を再確認できた。

魅力的な手話ツアーを企画することができれば、美術館に多くのろう者・難聴者を呼び込むことができるのではないか。ろう者・難聴者の来場を増やすことができれば、様々な施設やサービスの改善につながるだろう。日本における美術館の現状や課題を抽出した上で、美術館にどう働きかけていくかが今後の課題である。（管野奈津美）

第３回　アートと身体　Lecture

日　時　2019年11月23日（土）13:00―15:30
会　場　トット文化館 １階（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　49名（ろう者・難聴者 11名 / 聴者 38名）※スタッフ５名（ろう者・難聴者 3名 / 聴者 2名）

Guest：

南雲 麻衣　Mai Nagumo

アートコーディネーター / アーティスト。3歳半で失聴。5歳からモダンダンスを始める。小野寺修二（カンパニーデラシネラ）構成・演出の「鑑賞者」出演など。近年は、当事者自身が持つ身体感覚を媒体として各分野のアーティストと作品を生み出している。

Guest：

百瀬 文　Aya Momose

アーティスト / 映像作家。1988年東京生まれ。撮影者と被写体の関係性のゆらぎを映像自体によって問い直す作品を制作している。近年の主な企画展に「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」（森美術館、2016年）など。

この回では、ろう者と聴者の２名のアーティストをお迎えした。

音からの解放、視覚で踊るということ

南雲麻衣氏は、象の鼻テラスでアートプロデュースのかたわら、アーティストとして、当事者自身が持つ身体感覚を媒体に各分野のアーティストと作品を生み出している。

彼女は３歳半で失聴し、母親に「耳が聞こえるようになるよ」と言われ、７歳で人工内耳埋込手術を受ける。現在は、人工内耳[1]を使って音声を聞き取っているが、人工内耳を外すとろうの状態になる。学生時代は、周囲から「聞こえない」人のレッテルを貼り付けられるような視線で見つめられ、自分は人と違うことに肯定感が持てなかった。５歳からダンスを始め、マジョリティに対して自分の言葉で伝えられないわだかまりをダンスで発散していた。大学時代は手話に出会うものの、ダンスでは聴者とのコミュニケーションで自分を出せないまま、手話とダンスの両方の世界を往復していた。しかし、人工内耳を外して音楽を聴くのをやめると、その重圧から解放された。視覚を頼りにきっかけを掴む方法を発見し、他人に助けを求めたりすることを知ったという。

南雲氏の作品の一つに、タップダンスと身体表現のコラボによるセッション「In The Zone vol.29 米澤一平×南雲麻衣」がある。南雲氏がタップダンスの振動と脚の動きを観ながら即興で踊りを創り上げていった内容だ。南雲氏は、自分の主観的な視点（視覚）から表現した踊りが、第三者（観客）によって違った解釈が生み出されていく面白さを知り、自分が表現する意味を見出したのだという。

私自身、社交ダンスの経験があるが、人工内耳を装用したとしても音を聞いてすぐ踊れるわけではなく、練習を重ね上げながら身体に叩き込んでいかなければいけない。いわばろう者・難聴者が音を聴いて踊ることは、聴者からろう者に課された一種の呪縛でもある。南雲氏はアートを通して、その呪縛から解放される術を身につけたということだ。

ゆらぎ続ける身体を疑い、映すということ

続いて、アーティスト / 映像作家の百瀬文氏より活動

1　重度難聴者が聴力を取り戻すための機器。マイクロホンで集めた音を体外の本体で処理し、手術で埋め込んだ体内装置に信号を伝えて音を聞く仕組みになっている。主に重度の感音性難聴が使用している。個人差はあるが、一般に静かなところで、近くからの１対１の会話は聞き取りやすくなる。『聞こえにくい方の家族や周囲の方のために 聞こえに困ったら 2』（特定非営利活動法人 東京都中途失聴・難聴者協会発行）より抜粋

の紹介と作品の説明が行われた。百瀬氏は、撮影者と被写体の関係性のゆらぎを映像自体によって問い直す作品を制作している。主にビデオを使って、音声とその映像に映された身体を媒介に、私たちの生活で当たり前になっている仕組みや法則を暴き出そうとする。美術大学在学中に絵が描けなくなった時期があり、パフォーマンスに自分の活動を移すようになったという。

その作品の一つに、アナウンサーとして振る舞っている百瀬氏が、「kore wa anata no chi dewa ari masen. これはあなたの血ではありません。」「kore wa watashi no chi dewa ari masen. これは私の血ではありません。」というフレーズをひたすらくり返し、日本語の発音を学習させる、教育番組を模倣した映像作品《Lesson(Japanese)》(2015)[2]があった。

言語教育というフォーマットを用いて、日本語を強制して人々の言葉を奪っていった日本の植民地時代におけるプロパガンダ的な行為を連想させられた。

私はこの映像に映っている被写体を見つめるうちに、不意に西川はま子[3]さんと自分を重ねてしまった。私は生まれつきの難聴者で、長いこと口話法[4]を活用している。ろう教育法において議論はあるが、社会福祉法[5]が成立する前の当時は、手話教育法で子どもが社会で自立生活できるかの懸念があり、口話法による日本語獲得に意識が向けられたという背景がある。そもそも「音声コトバ」とは、人類史上、とりわけマジョリティによって生みだされ、人間が生まれて自然に身に付くのが常識となり、人間との意思疎通によって人間社会の歴史が始まったのも過言ではない。それとは対照的に、難聴

者の口話獲得に関する興味深い記述がある。下記を引用したい。[6]

「胎児期から乳幼児期までに、すでに聴覚を損傷していた人間」の場合、この世に「音声コトバ」は生理上存在しないのである。赤ちゃんの時から聞こえぬ児が「音声コトバ」を身につけるのは、人生の第一歩から、自分でない自分、いわば「第二の自己」を創ったうえでの行為ではないか。(中略)

自分に存在しない生理部分だけを使った虚構の「第二の自己」による表現ー人間社会で他に存在しないほど不自然な、至難の術、あえていえば虚構の芸術ともいえようか。

成長期に失聴した中途失聴者と違い、難聴者は生まれつき耳が聞こえない。本来の「音声コトバ」を知らないのだ。それでもなお、ろう・難聴児当事者は、先生や両親から発声方法を見たり聞いたりし、何度も繰り返すことで、より近い発声を目指していく。こうして、表面上は、コミュニケーション獲得に成功したかと思われるが、口話獲得という「一つの型」にはめることで、思考停止させられてしまう。さらには、当事者本人にないものを無理やり形成する「第二の自己」を享受できず、多様な個性を持つ子ども本人の可能性を見失い、大人になっても空虚なアイデンティティを持つ自分に苦しみ続けているのである。それは、自分と同じろう者とのままならない手話のやり取りにおいても顕著に現れていると思う。

南雲氏も人工内耳装用によって「音声コトバ」を身につけた一人であり、その過程を辿ったと想像できる。彼女は最終的に人工内耳を外したことで「本来の自分」を取り戻し、音との共生方法を見出していった。しかし難

2 国立新美術館で行われた日韓国交正常化50周年を記念する展覧会「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋—日本と韓国の作家たち」に展示された。https://www.nact.jp/exhibition_special/2015/af2015/

3 西川はま子(1916-1957)聴覚障害者。3歳の頃から口話法教育を受け、社会人としても活動した。“ろう児口話教育の金字塔”と言われた。

4 明治時代の日本のろう教育は手話教育と口話教育があり、父・西川吉之助が生み出した口話法が、後の日本のろうあ学校の口話教育法として採用される。口話法には、①音声言語を習得する方法と②コミュニケーション手段としての口話がある。両親を教育する側面では、幼児における目標達成つまり口話による日本語の獲得に意識を向けようとするあまり、手話への嫌悪感を植え付けてしまう面もある。

5 1951年に規定され、日本の社会福祉に関するあらゆる事項の共通基礎概念を定めた法律

6 津名道代著『難聴 知られざる人間風景 下 日本史に探る聴覚障害者群像』(文理閣/2005年)より

聴者の大部分は「第二の自己」でアイデンティティに苛まれている。

これはろう者・難聴者の世界の問題だけではなく、マジョリティとマイノリティに共通する普遍的な問題であるのが百瀬氏の作品からも分かる。

本質を浮かび上がらせる装置としてのアート

最後に、南雲氏が出演する百瀬氏の映像作品《Social Dance》(2019)について話題が展開した。この作品は南雲氏扮するろう者の女性と聴者の男性、カップルの会話で展開される。男性に対してフラストレーションが溜まっている女性が、昂ぶりながら手話でその男性に不満を主張する。すると男性は彼女を落ち着かせようと、彼女が動かすその手に寄り添うかのように強引に止める。その行為が、その女性への「抑圧」となってしまう、悲劇の作品だ。

南雲氏と百瀬氏のセッションを通して、私たちは、膨大な情報をきちんと見ているかのようでいて、実はオブラートで包んだ塊として曖昧に見ていることに気付いていく。

今回興味深いと感じたのは、質疑応答の中で、とあるろう者が「音に頼って踊っていないと言っていたが、それは本当なのか？頭の中でどこか音の記憶に引っ張られているのではないか」と南雲氏に質問したことだった。その質問に対して「音と無音、それぞれ切り分けている」と南雲氏は回答した。それが事実なのかどうかは誰にも分からない。ただ一つ言えるのは、それが南雲氏の真実なのだということ、そして人の数だけ真実があり、自分の価値観を疑わせる装置としてアートがあるということだ。

一人ひとりが事象をじっくり見据え、様々な人との対話を繰り広げていくことによって、自分の想像を越えた発見と探求が生まれていく面白さを感じた回であった。
(森岡見帆)

第４回　感覚の境界を超える　Film

日　時　2019年12月13日（金）19:00―21:00
会　場　象の鼻テラス（神奈川県横浜市中区海岸通り 1-1）
参加人数　42名（ろう者・難聴者 9名 / 聴者 27名）※スタッフ 6名（ろう者・難聴者 4名 / 聴者 2名）

Guest：

八幡 亜樹　Aki Yahata

映像作家。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。《ミチコ教会》（2008）が注目され金沢21世紀美術館や森美術館などで展示。映像インスタレーションをあらゆる「生きること」のための思考装置と捉え、取材をベースとした制作を行っている。

Guest：

雫境　Dakei

舞踏家。国内のみならず欧米、南米を舞台に活動。2000年にユニット・グループ「雫」を旗揚げ、国内外で公演、ワークショップを行う。現在ユニットグループ「濃淡」に改名し、活動。また、アニエス・トゥルブレ監督の映画『わたしの名前は ...』等に出演。

目の前に広がる横浜港が一望できる、開放的な公園の中にある象の鼻テラスにて、インド人の盲人と日本人のろう者のロードムービー『TOTA』[1]を上映した。その後にコーディネーターの荒木夏実氏と監督をつとめた八幡亜樹氏、出演者の雫境氏の３人でトークを展開。

『TOTA』より

コミュニケーションの根源を探る作品づくり

『TOTA』は映像作家の八幡亜樹氏によって制作された2012年の映像作品である。国際交流基金からインドに関わった作品を制作してほしいと依頼されたのがきっかけでこの作品が生まれた。八幡氏は大学院在学中に《ミチコ教会》（2008）が注目され、金沢21世紀美術館や森美術館などで紹介された気鋭のアーティストであり、映像インスタレーションをあらゆる「生きること」の思考装置と捉え、取材をベースとした制作を行っている。『TOTA』は、そんな彼女が「コミュニケーションの根源とは何か」を問うて作った映像だ。

映画はインド人の盲人、ソムラージが蝋燭を作るための道具を手で触って確かめながら、蝋燭を１個１個作っていく場面から始まる。そして、ろう者である雫境が家族と交流する日本での日常が映し出され、やがてこの二人のインドでの不思議な出会いが描かれる。互いに共通の言葉も視覚も聴覚情報もない中、なんとかコミュニケーションを取ろうと工夫する二人。トラブルや夢の中のような奇妙なできごとが起こり、路地で踊る雫境や歌を歌うソムラージの印象的な場面が挿入される。

この映画の奇妙な点は、盲人が登場しているのにも関わらずほぼ無音であることだ（まったく無音ではなく、全編52分のうち４ヶ所だけ環境音や歌声が出てくる）。雫境はろう者であり、家族と手話を使って会話をしているために言語情報としての情報が入るのに対して、盲人のソムラージから得られる情報は佇まいと動作のみである。八幡氏によると、「ソムラージ氏の声を聞くことで彼の身体に観客が入り込めると思った場面に音楽をつけた。ソムラージ氏と雫境氏の二人きりの世界（無音の映像）からいきなり町の音が出る場面については、二人の感じているインドの皮膚感覚を雑踏の音で観客にも共有させたかった。直感的に音をつけていたが、振り返ってみると、各場面で音がついている意味は微妙に異なっていたと思う。」とのことだった。

この視点は雫境、本来はろう者の視点であったともいえる。トークで彼は八幡氏から「好きなように撮って」とビデオを持たされ、日本とインドでそれぞれカメラを回していたと語っていた。今まで監督が撮影したと思っていた映像が、実は出演者・雫境が撮影していた映像が紛れ込んでいるのだと気づく。最後にソムラージの顔がアップになっている場面なども、見方を変えると雫境の

1　監督：八幡亜樹 / 2012年 / インド・日本 / 日本手話・日本語・ヒンディー語・日本語字幕・英語字幕 / 52分 / 無音（一部音あり）　インド人の盲目の蝋燭職人と、日本人の聾の舞踏家、国籍も言語も違う二人がインドで出会う。共通の言葉も視覚や聴覚情報もない極限の手段の中で、互いの存在を認識していく姿を追ったロードムービー。日本手話でもヒンディー語でもない、「二人だけの言語」と空間からコミュニケーションの根源を問う。国際交流基金の制作協力のもと、インドのラリット・カラ・アカデミー＝国立芸術アカデミーにて上映された。

眼を通して見えてくる光景でもあることが分かる。

突如現れてくる顔のアップや、歩く人の振動をダイレクトに伝える映像のブレ、じんわりと空間を覆ってくる空間が体と脳みそにサブリミナルのように染み込んでくる。常に無音である世界に身に置いている私にとって、今目の前で起こっている現象として違和感なく受け取り、気づいたら終始雫境に感情移入していた。ソムラージと雫境はこの映画を支配していた。国籍も言語も全く異なるこの2人の佇まいと存在から生まれる空間＝『TOTA』だった。

八幡氏は、観客に入り込んでもらうために、財布が盗まれるなど、ある程度のストーリーラインは作ったが、その後の流れや会話のやりとりは二人に任せたのだという。雫境氏はどのようなことが起こるのか想定できず、内心緊張していたそうだ。たとえば「金」といった社会通念のある物に関しては具象的であるが故に通じやすいが、それが生死や数字などの概念になるとなかなか通じないのだという。歳を伝えるのにソムラージの手のひらに「41」と書いたが、伝わらず、「11」と表してきたなど、「自分の考えを相手に理解させるのは非常に難しいと気づいた。」と雫境氏。しかし、心臓や息の動作をソムラージに共有することで伝わる部分があり、人間としての根幹をもとにコミュニケーションが少しずつ進んだという実感があったようだ。雫境氏はソムラージ氏との交流を通して、実際に自分の行動を彼に真似させることを繰り返すことで「空間」も重要な存在であることを感じ取り、その感覚に集中するようになったという。

この映画のタイトル『TOTA』は、ヒンディー語で「オウム」という意味だそうだ。撮影のときに、ソムラージが「魂は鳥である」と言ったことからタイトルが決まったのだという。「正式なタイトルは文字ではなくオウムの絵で表現している。二人が『魂は鳥である』という事を触れ合ってお互いに説明しあっていた時に、私から見て分かり合ったと思える瞬間があった。二人の共有言語となったものの象徴として『オウム』を象徴化し、絵としてタイトルにした」と八幡氏。この件について調べたところ、鳥と神話の関わりについて考察された文献[2]を発見した。

「一古代では常に特定の神のそばにいる鳥、また、その神の象徴とされた鳥は、聖なる鳥「聖鳥」と呼ばれた。インドでは、ヒンズー教の創造神であるブラフマーの聖鳥がハクチョウであったり、メソポタミアでは、シュメール神話の「戦いくさと豊穣の女神」でもあったイシュタルの聖鳥がクジャクバトであったりした。さらに神話の中には、世界の半分を覆うほどの翼をもった巨鳥や、定期的に死と生を繰り返すことによって永遠の命を維持する鳥さえも存在した。神話に登場する鳥は、その時代にその土地に暮らし、神話を語り継いだ人々の認識の広がりの内にいた存在である。それゆえに、人々と接点のない鳥は神話には登場しない。」

鳥を神、もしくは神の使いとして捉える認識は、個人を越えて集団や民族、人類の心に普遍的に存在しており、ユングの集合的無意識を彷彿させる。またこの映画には魚が出てくる。魚にはエピソードがあり、「ベジタリアンというソムラージ家の文化を表出させるために仕掛けた」と八幡氏。ソムラージの家人がベジタリアンということを知らず、仕方なく家の前に捨てたという雫境が「あれは輪廻転生なのではないかと思っていた」と発言。偶然の一致とはいえ、生死を繰り返す火の鳥と魚が被ったのは、死が身近にあり、生死を強く意識せざるをえないインドに滞在した雫境氏と八幡氏の深い無意識と結びつき、現象化されてしまったのではないかと思わせてしまうようなエピソードだった。またスタッフの管野によると、「魚」はデフアートでろう者のシンボルとしてよく出現するのだという。理由としては、ろう者と同じく耳がない、水の中でも声による会話を必要としないためだ（日本の場合はタツノコがシンボルとされている）。

2　細川博昭「人と鳥の文化誌」Web 春秋 はるとあき（最終閲覧日：2019 年 12 月 23 日）https://haruaki.shunjusha.co.jp/posts/1437

今回の映画では雫境が買った魚が家の外に置かれていた。魚を雫境（ろう者）の化身として見立てると、ソムラージの家族から拒絶された雫境がもう一人の自分（仲間）に出会うという新たな解釈が現れてくる。他の場所での上映を含め、『TOTA』を5回観たが、そのたびに様々な意味づけが生まれてくる、不思議な力を持った映画である。

人が生きる根源を撮る

八幡氏は人間が生きる根源的なところに触れるようなものを作りたいと漠然と感じていたという。コミュニケーションとしてソムラージと雫境が出会い、形として現れてきたものだけではなく、人間の中にある分子的のような動きや映像の粒子みたいなものをずっと描きたいという想いを抱えていたようだ。この『TOTA』を通して、自分の中である程度の所に触れることができた感覚があったとともに、自分の想いに恐らく気づかせてくれた作品だったと語る八幡氏。

さらに彼女は述べる。「『そこ』に触れるためにどうしたらいいのかという問いから、医学を学び始めた。私の中では、人類は表現をする存在であり、それは生きるそのもの。芸術も医学も全ての人に備わっている表現（生きること）に関わるもの。自分の中では医学は芸術でしかない。」と。社会では社会的な制度の固有名詞で分類しがちだが、医学は芸術であり、それをどう説明していけるのか最近とてもよく考えているそうだ。また“医療”でも“医学”でもなく「医術」とでも呼ぶべきものかもしれず、制作や臨床経験を通して明らかに出来たらよいと感じているとのことだった。

最近、東京大学の医師など医学に関わる多くの人が「人は死なない、魂は永続する」というようなスピリチュアルな経験を本にしている。医術の定義を総括すると「科学は明文化できるもの、技術は明文化できない部分を含むものであり、医術は後者に近い」[3]という。現代では科学＝医学という公式が固定化されてしまっているが、沖縄のユタやカトリック教の神父、中国医学の気など元々昔から医学と超自然は親密に関わりあってきた。「医学と芸術」はプリミティブで深い部分で繋がっている。「コミュニケーションの根源」とは何かを問うためにこの映画は作られたが、皆が探し求めていたのは「人間」そのものの根源だと八幡氏と雫境氏のトークを通して腑に落ちた。

ドキュメンタリーとフィクションの間、言葉と非言語の間、身体と非身体の間、生と死の間、聾（ろう）と盲の間。様々な境界の狭間と、その間に垣間見える、二人から醸し出される「気」は、境界そのものを越える。この映画の視点は雫境氏の眼、八幡氏の眼、そしてソムラージ氏が記憶している最後の色である緑色で彩られた彼の眼が重なり合う。まるでパラレルワールドのように接触し、離れ、重なっていく。『TOTA』は神話でもあるのかもしれない。（牧原依里）

3　コトバンク「医術」（最終閲覧日：2019年12月23日）　https://kotobank.jp/word/%E5%8C%BB%E8%A1%93-30681

第5回　アートとマイノリティ　Lecture

日　時　2019年12月21日（土）13:00-15:30
会　場　トット文化館 1階　（東京都品川区西品川 2-2-16）
参加人数　33名（ろう者・難聴者 7名 / 聴者 26名）※スタッフ 4名（ろう者・難聴者 3名 / 聴者 1名）

Guest：

金 仁淑　Kim Insook

アーティスト。1978年生まれ。在日コリアンの家族に焦点を当てた作品で注目される。主な展覧会に「ゴー・ビトゥイーンズ展：こどもを通して見る世界」（森美術館、2014）、「愛について アジアン・コンテンポラリー」（東京都写真美術館、2018）など。

Guest：

牧原 依里　Eri Makihara

映画作家。ろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』（2016）を雫境（DAKEI）と共同監督。ろう者当事者としての「ろう文化」の視点から問い返す映画表現を実践。

揺れ動くアイデンティティ

まず、写真や映像、そしてサウンドやオブジェなどを使ってインスタレーション作品を発表してきたアーティスト・金仁淑（キム・インスク）氏から、これまでの制作してきた作品やコンセプトについて紹介いただいた。彼女にとって写真や映像は「人と出会う」ための行為であり、それを通して経験した様々なことを鑑賞者と共有する空間を創造している。彼女は在日コリアン３世として生まれたことが作品制作に大きな影響を与えたと話す。

在日コリアンとは、日本の朝鮮植民地支配によって朝鮮半島から日本に移住した人々とその子孫のことを指す。今は５世や６世が誕生しており帰化する人も増え、アイデンティティの多様化が進んでいる。金氏も日本で生まれ育ち、日本語がネイティブであるにもかかわらず、「金」という名前がゆえに、「何人ですか」「どこで生まれたんですか」「国籍は何ですか」といつも聞かれ、ジレンマを感じた。韓国に留学した際も、同じことを聞かれたという。その時に、日本と韓国の間で揺れ動く、どちらにも属することのできない奇妙さを感じ、その様子を毎日記録に残した作品が、「ニムに捧げる手紙 letter to you」という作品だ。

写真の専門学校を卒業し、まず撮影対象に選んだのが朝鮮学校であった。金氏自身も朝鮮学校で学び育った。当時校舎の外では右翼の車が徘徊し、今でいうヘイトスピーチが行われていたが、実際には、受験とは無縁で、のどかで自由気ままな雰囲気の中で過ごした。在日を被写体として撮影された作品をリサーチしたところ、歴史的産物としての移民の姿、またモノクロで撮影されたものが多く、在日＝暗いイメージがあったという。それとは対照的な学校に流れる柔らかい雰囲気や子どもたちの自然な姿をおさめたいと思ったそうだ。日本の子どもと変わらない屈託のない笑顔がそこにはあった。学校を多様な人々が通う空間として捉え、「sweet hours」シリーズとして、朝鮮学校で撮影した写真とサウンド、学校の机などを組み合わせ、学校の声が机の中から聞こえたり、机の山の中から音が鳴ったりする様々な形で展示を構成してきた。

2008年から制作している在日家族のポートレートシリーズ「SAIESEO（サイエソ）：はざまから」では、在日１世から４世までの家族史をインタビューした後に、家の中で家族写真を撮影した。日本の家屋の中に、韓国の家具や衣装が混在する在日の日常空間には、その歴史が垣間見える。「リアルウェディング」では、自分と夫との実際の結婚式をパフォーマンスとして撮影し

た。そこには日韓の伝統の儀式と偽りの儀式が織り交ぜられている。家族や伝統という概念を問う作品である。「House to Home」プロジェクトでは、アーティスト・イン・レジデンシー・プログラムで滞在したソウルの近代韓国家屋を近所から家具を借りて改造し、宴会パフォーマンスを実施した。近所の人々も参加し、地域やコミュニティと家族のような関係を結ぶ家を作り上げた。金氏にとっての「家族の概念」は、血のつながりや国境を越えていった。

現在関わっているプロジェクト「Continuous Way 北大阪朝鮮学校 2020」は、2001年から金氏が撮影してきた朝鮮学校の最後の中学生と卒業生が出会う場を設け、過去から現在、未来について語り合うプロジェクトである。少子化の影響もあり、中学は、3年生6人のみという状況である。変わってしまった現在の学校の景色や机と椅子を擬人化した写真などを撮っている。このように、人と人の関係性やマイノリティの中の多様な個性に焦点を当て、気づきを促す場を作ろうと試みてきた。

映像を通して考えるろう文化

次に、牧原依里氏から「映像を通して考えるろう文化」というタイトルで講演が行われた。彼女は映画を観ることは好きだったが、自ら映画を制作することは全く考えていなかったという。映画作家を目指したのは、たまたま旅行で訪れたイタリアのローマで「第一回ローマ国際ろう映画祭 CINEDEAF」に遭遇したことがきっかけであった。ろうをテーマにした映画が次々と上映され、ろう者の映画監督が舞台に登壇し手話で挨拶する。「ろうでも映画が撮れる」ということに感銘を受け、自ら映画を作ろうと決意した。帰国後、映画の専門学校に入学するが、手話通訳の派遣交渉で苦労した。都道府県によっては、制度上、ろう者に学びたいという意欲があっても通訳を派遣してもらえない実情がある。

専門学校の課題で短編映画『今僕は死ぬことにした』を撮影した際、聴者の役をろう者に頼んだところ、意外にも上手に演じることができることを知った。つまり、ろう者は日常的にマジョリティである聴者の文化や習慣にさらされ、すぐ真似やコピーができる立場にあることを示しているとも言える。

2016年に「ろうの音楽とは何か」を問うた牧原氏のアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』（共同監督：雫境）が話題を呼んだが、聴者ろう者双方から賛否両論が出た。聴者からはこれは音楽ではないと言われ、ろう者からはあまりにも前衛的すぎて内容がわからないと言われた。宣伝のためにチラシにやむなく「無音の音楽」という文言を入れたが、本当は「ろう者の音楽」を問うたのであり、出演者から無意識に生まれ出てくるものを上手く引き出そうと試みた。

ろう者は長い間、病理的視点から障害者として扱われてきたが、1996年、木村晴美氏と市田泰弘氏による「ろう文化宣言」において「ろう者とは日本手話という日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である」と宣言し、当時のろう者コミュニティに大きな影響を与えた。そして手話には日本語と文法や構文など言語体系が全く異なる日本手話と、日本語の音声に合わせて手話を記号的に当てはめた日本語対応手話/手指日本語（難聴者や中途失聴者など日本語を先に習得した人々にとっては、有効なコミュニケーションツールとなっている）がある。母語として習得した日本手話に対して劣等感を持っていたろう者が誇りを持つようになった反面、「手話」の定義についての論争も起きた。最近は、人工内耳を装用するろう児の増加に伴い、ますますアイデンティティの複雑化を辿っている。

牧原氏は、ろう者が集い、また聴者も関わることのできる場所として2017年に「東京国際ろう映画祭」を立ち上げた。ろう映画祭は世界中に20以上あり、ろう者にとって欠かせないプラットフォームとなっている。牧原氏がアメリカのろう者監督とろう者俳優を招聘してワークショップを行った時、聴者の参加者から「自分がろう者の役をやっていいのか」という質問が出た。二人の答えは「Pass the role」つまり「役を譲る」というものであった。もし聴者役者がろう者を演じて欲しいと依頼されたら、適任のろう者を紹介するべきだと。しかし、東京国際ろう映画祭で鑑賞した聴者から、ろう者が演じた役について「聴者なのに手話が上手ですね」という感想が寄せられたように、ろう者がろう者役を演じるのが当然という環境が日本にはまだない。欧米では『ムーンライト』や『サーミの血』『エターナルズ』等のようにマイノリティ当事者が監督やスタッフ、役者として関わ

るのが主流となっている。日本の商業映画でも当事者を尊重する映画が作られることを願っていると話した。

さまざまなアイデンティティと表現

対談では、金氏や牧原氏が考える、家族の形やアイデンティティについて触れた。家族のルーツについて、金氏も在日２世の父と日本人の母が結婚したことにより母の実家から反対・断絶を受け、父方の親戚の中でも南北で思想が分かれ、イデオロギーや政治に振り交わされて育ったせいか、そこに一種のトラウマを感じていると分析する。自分の立ち位置も日韓関係の影響で変わってくるため、心の拠り所として家族の概念に強く求める部分もあるのだろう。その在日の立場について、牧原氏は難聴者や手話を知らずに育ったろう者と似ていると話す。口話で育ち、成人してからろう者と出会って手話を身につけるが、聴者の世界とろう者の世界、どちらにも属することのできない揺れ動く部分は近いのではないか、と。牧原氏の場合は両親がろう者で、手話で育った。難聴の姉一人だけ少し家族の中で立ち位置が違うと分析する。自分にとって声で話す親戚は遠い存在で、仮に結婚式をやる場合に呼ぼうとは思わない。時にろう者は、聴こえる家族よりも血の繋がらないろう者の友人との結びつきを強く感じる一面もある。「家族の形」とは何かについて、二人の話を通して考えさせられた。

またろう者のアイデンティティについても語られた。人工内耳装用児の増加に伴い、手話も音声も両方使いこなせるケースも増加している。さらなる技術の発達に伴い、ろう者のアイデンティティも変容していくだろう。それは誰にも止められないし、想像もつかない。

金氏の「サイエソ」シリーズのように、アーティストは時に祖先や自国の文化に関連する作品や自己や他人のポートレートを通して、自分のアイデンティティを探る。自分を形作ってきた文化的･精神的な要素を分析し、国や文化の自身の立ち位置を確かめ、どのように周囲の環境や世界を理解するか、考えを巡らせる。このようなアイデンティティの模索は、作品制作において重要な役割を果たしている。以前アメリカで欧米のろう者の作品を研究していた時に、社会的なマイノリティとして孤立してきた悲しみ、母語である手話への抑圧に対する苦しみ、聴者世界の中で生きる葛藤などが表現された作品を多く目にした。ただ、マジョリティへの怒りが先行している部分があったのも否めない。アイデンティティと作品制作は切り離せない関係だが、マイノリティであることを強調するあまり生じる強すぎるメッセージは凶器にもなる。マイノリティの葛藤や違和感をどのように社会に伝えるかは今後の課題であろう。

金氏は、現代の在日コリアンとしての生き様をありのままに表現しながらも、様々な人々が繋がる空間を創り上げてきた。そこに家族への静かな憧れと愛を感じる。牧原氏も日本手話を母語として習得したろう者の視点から、映画を通してろう者の芸術や文化、言語について考える場を提供しつづけている。アートは揺らぎ続けるアイデンティティを記録する装置であると同時に、様々な人が繋がる場へと発展する可能性を秘めている。マイノリティとしての視点を取り入れたアートは、絡まってしまった糸を解きほぐすヒントを私たちに与えてくれるだろう。（管野奈津美）

ART

アートを通して考える：ろう者と聴者が集う「場」のために Review

Moderator: 荒木 夏実 Natsumi Araki

東京藝術大学美術学部准教授。慶應義塾大学文学部英米文学科卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修士過程修了。キュレーターとして三鷹市芸術文化振興財団、森美術館で現代美術の展覧会を企画、2018年より現職。現代美術を通して社会を考える企画や執筆活動を行う。森美術館での主なキュレーションに「ゴー・ビトゥイーンズ展：こどもを通して見る世界」（2014）、「六本木クロッシング 2016展：僕の身体、あなたの声」など。

将来「ろう者の芸術祭」を開催するために、美術に関するアドバイスがほしいと依頼を受けたのが2018年。それまでろう者と接する機会が全くなかった私が、ろう者のためのアート講座を企画することになった。

長年現代美術のキュレーターとして展覧会企画に携わってきた私は、「障害」や「福祉」という視点とは異なる、アートのプロフェッショナルとしての立場からろう者の世界にアプローチしたいと考えた。2018年の初年度は全くの手探りだったが、キュレーターやアーティストを招いた講座をコーディネートすることを通して、手話による活発な意見が飛び交うろう者のコミュニケーションに触れ、その文化に強い魅力と可能性を感じた。[1] 始まりはろう者に向けたプログラムだったが、むしろ私はこの豊かでエキサイティングな手話の議論の現場を、多くの聴者に体験してほしいと考えた。

また牧原依里さんが雫境さんと共同監督した映画『LISTEN リッスン』のテーマである「ろう者の音楽」という発想にも興味が沸き、私が勤務する東京藝術大学で牧原さんに講義をお願いしたり（2019年6月14日）、「聞こえる人と聞こえない人のための『音楽』をめぐるトーク」[2]と題して牧原さんたちと芸大の教員や卒業生が音楽について議論するシンポジウムを開催した（写真）。

そして今年度の「アートを通して考える」では、言語や人種、障害などの境界を超えるアートの可能性を拠り所とし、ろう者と聴者のアーティストやエデュケーターが新たな視点や課題を探るためのプログラムを企画した。東京都庭園美術館と東京都現代美術館でさまざま

右から牧原依里、雫境、日比野克彦 （撮影：原千夏）

右から熊倉純子、和田夏実、雫境、牧原依里、小野龍一、荒木夏実、日比野克彦 （撮影：原千夏）

1 「ろう者の芸術推進事業」として2018年8月11日、12日にトット基金文化館にて講師を招き、荒木がモデレーションを務めた。講師は端山聡子（横浜美術館主任エデュケーター／主任学芸員）、管野奈津美（ろう学校美術教諭）、南川憲二（アーティスト「目」）、木村絵理子（横浜美術館主任学芸員）、山城大督（アーティスト）、松川朋奈（アーティスト）、毛利直子（高松市美術館学芸員）。また10月8日に同館にて「境界を超えるためのアート」と題して荒木による現代美術のレクチャーおよびろう者のクリエイターによる芸術活動の紹介を行った。講師は雫境（舞踏家）、牧原依里（映画作家）、江副悟史（日本ろう者劇団）、廣川麻子（TA-net）。美術関係者や荒木が声がけした東京藝術大学の学生などの聴者は手話の対話に初めて接する者も多く、刺激を受けたという感想を得た。

2 「東京藝術大学ダイバーシティ月間2019」のプログラムとして7月16日に東京藝術大学上野キャンパスにて開催。登壇者は、牧原依里（映画作家）、雫境（舞踏家、アーティスト）、和田夏実（インタープリター、アーティスト）、小野龍一（音楽家、アーティスト）、日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長）、熊倉純子（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科長）、荒木夏実（キュレーター、美術評論家、東京藝術大学美術学部准教授）。『ウェブ版美術手帖』（2019.9.25）にレポート掲載 https://bijutsutecho.com/magazine/insight/20584）

なラーニングプログラムを実施してきた八巻香澄さんには、これまでの企画に関するトークとともに、都現美での彼女の企画展「MOT サテライト 2019 ひろがる地図」の手話ツアーを依頼し、美術館で作品について語り合う時間を参加者と共有した。「とびらプロジェクト」のマネージャーとして市民と美術館、大学をつなげる活動を行ってきた伊藤達矢さんのトークでは、市民が自主的にそれぞれの能力やアイデアを提供するプログラムに大きな可能性を感じた。スペシャルイベントとして「Diversity on the Arts Project」の協力を得て東京藝術大学で開催したジョン・ウィルソンさんによるトークでは、イギリスにおけるろう者主体のプログラム、美術館の整った体制、ろう者の積極的な芸術活動への参加について知るとともに、日本の状況との大きなギャップも痛感した。

また、今回の企画ではろう者と聴者がアートを通してともに語り合うというコンセプトをより強く意識し、ろう者と聴者のクリエイターを 1 人ずつ招いてそれぞれのトークの後に対談を行うプログラムを 3 回実施した。アーティストの百瀬文さんと南雲麻衣さんの回では、南雲さんが出演する百瀬さんの作品などについて話を聞きながら、聴覚を含む人間の身体性やアイデンティティ、表現の自由、加害と被害などについて刺激的な議論が展開された。八幡亜樹さんと雫境さんの回では、監督と出演者という異なる立場から映画『TOTA』に関する話が語られ、作品のもつ多層性を感じた。牧原依里さんと金仁淑さんのトークでは、ろう者と在日コリアンという異なる「マイノリティ」の問題について触れた。ポリティカルあるいは繊細なことがらであっても、アートにはそれを作品へと昇華させる力があり、アートを通した議論にもまたより開かれた可能性がある。アーティストの言葉や作品を通したからこそ語ることのできる話題も多かった。

参加者からの直接の意見やアンケートを通して、これまで知らなかった文化や価値に触れ、異なる考えや環境、問題を知ったことを有意義に感じたという声が多く寄せられた。単なる体験談にとどまらず問題に深くアプローチできている、芸術の本質に関わる濃い内容が刺激的、異なる当事者グループの意見交換によって得られることがあるなどの意見もあった。

ろう者と聴者がアートについて、あるいはアートを通して語り、手話と声が飛び交う空間に多様な参加者が集う。そのような「場」を作ることができたことをうれしく思う。そして私にとっても、牧原さんをはじめろう者のクリエイターたちとの協働はきわめて貴重な経験であり、知らなかった感覚や環境に対して開眼する機会となった。これこそがアートの最も重要な効果だと実感している。

第 2 回「アートを体験する」での筆者（右）と牧原依里（左）

育成×手話×芸術プロジェクト

映画部門

＜映画部門のロゴマークについて＞
日本手話で「映画」を表しています（ロゴデザイン：飯島愛美）

FILM

映画部門　全体概要　Overview

映画部門では、ろう者当事者のクリエイティブな人材育成に向けた取り組みとして、2019年6月から2020年3月の9ヶ月にわたり、ろう者を監督に据えた制作実地研修を行った。

自作品が劇場公開された経験を持つろう者監督2名、今井ミカと牧原依里を監督として据え、ろう者を中心に構成したスタッフ・役者に、映画制作現場における初歩的な知識と技術を習得する場を提供することで、将来、映画の制作現場で活躍できるスタッフを持続的に育成することを目的とした。

今井ミカは、お葬式をモチーフにろう文化と聴文化の相違をテーマにしたブラックコメディの短編、牧原依里は家族の擦れ違いを描いたシリアスドラマの中編、両方ともフィクションをベースに制作を進めた。

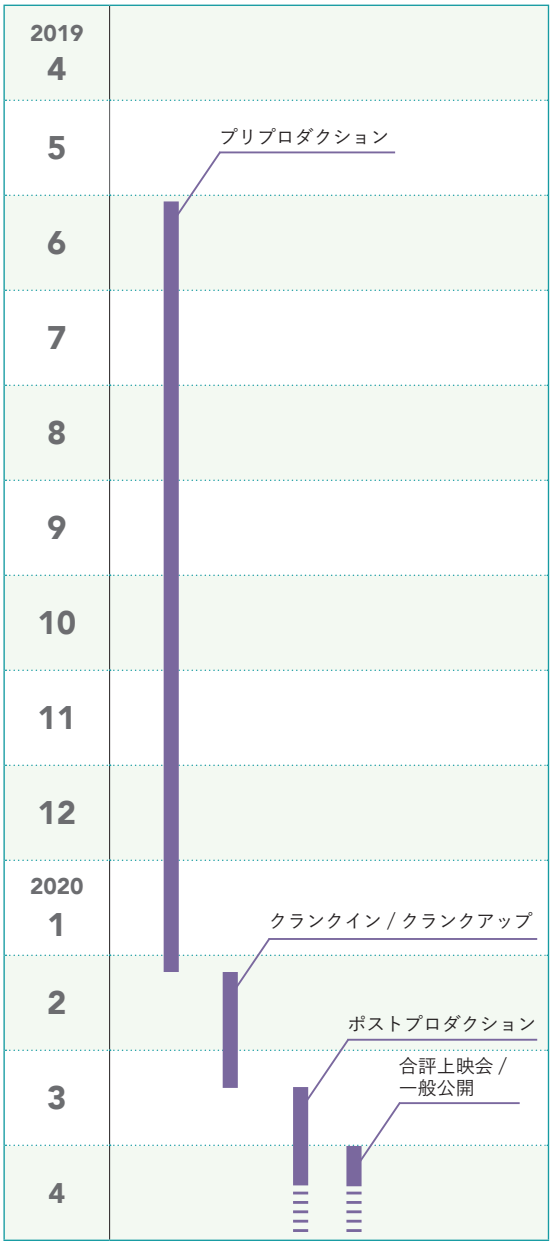
いずれも監督と助監督を中心に脚本や執筆やロケハンなどプリプロダクション（撮影前の作業）をスタッフと共に行い、実践をもとに知識を蓄えていった他、映画でよく使われるシネレンズやスタビライザーを使って撮影を行った。ただし今井ミカ監督作品は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、参加者の安全を考慮して撮影を一部中止せざるを得ない状況となった。

両作品ともにコロナウイルスが終息次第、中断していたブラッシュアップやポストプロダクション（撮影後の作業）を行う。その後国内外映画祭に出品の上、各地で完成作品の合評上映会を開催し、多方面の方々から講評をいただく予定である。

今回の企画では、映画監督であるろう者2名をメインに、同じ言語（日本手話）をもつ人同士で経験者と未経験者を交えて作品を制作していった結果、当事者ならではの視点を互いに共有していくことができ、映画の基本に取り組みながら様々な手段に挑戦できたように思う。お互いが持っている技術や知識、知恵を出し合っていくことで、映画現場でその集大成が発揮されるという醍醐味を経験できた。また、スタッフ一人ひとりにとって次のステップへと向けた作品制作へのモチベーションアップに繋がったと実感した。

全体スケジュール

2019年6月～2月	プリプロダクション
2020年2月～3月	クランクイン / クランクアップ
2020年3月	ポストプロダクション / 完成
2020年4月以降	合評上映会 / 一般公開



FILM

牧原依里監督作品『田中家(仮)』 Production

Director:

牧原 依里 Eri Makihara

2013年ニューシネマワークショップ受講。2014年 Movie-High14『今、僕は死ぬことにした』(短編映画) 上映。2016年に雫境との共同監督で『LISTEN リッスン』劇場公開、第20回文化庁メディア芸術祭アート部門審査員推薦作品、第71回毎日映画コンクールドキュメンタリー映画にノミネートされる。ほか東京国際ろう映画祭設立や『ヴァンサンへの手紙』宣伝配給など映画関連の事業を担う。

映画情報:『田中家(仮)』フィクション/60分(予定)/2020年/日本/日本手話/カラー/サイレント
出　　演:長井恵里・佐々木優佳・高木公佑・酒井郁
スタッフ:[監督・脚本・編集]牧原依里　[助監督]今井ミカ　[撮影]大橋光　[撮影アシスタント]棚橋瑛梨　[制作]有澤智子・中川恵美
あらすじ:東京都内の片隅に立つ一軒家。ろうの田中真衣とその姉、難聴を抱える美穂は、重度の高次機能脳障害を負った美穂の旦那、慶祐と共に生活をしていたが…無音で描く家族の物語。

今までいくつか作品を撮ってきたが、同じ志を持つろう者スタッフをチームと構成し、映画制作を行うことは初めての経験だった。聴者の世界からは知識と知見を与えてくれるが、ろうの世界からは同じ視線を持つ仲間と一緒につくりあげていく過程で生まれる「ワクワク」を与えてくれた。

『田中家(仮)』より

ろう者が演じることによって生まれる空間や間、聴者の世界で生まれたルールに囚われない撮り方や構図の捉え方など、様々な気づきをこの作品を通して発見できたとともに映画は映画であるという普遍性を孕むことを思い知った。また「映画」という枠に入れることで、手話を言語としてもつ人の身体的な間合いや、視覚言語(手話)の存在をコントロールすることの難しさを知り、攻略していく面白さも学べた。

今回は久しぶりのフィクションとして、ろう者と難聴者の姉妹を中心に「家族」を問いた作品をテーマにした。実は4年前から温めていた、聴者の男性とその母のろう者を主題とした家族物語をベースにしている。しかしその物語は長編の尺だったため、その聴者の男性の奥さんとその妹をテーマに内容を構成し直した。また台本はあくまでも参考として留め、役者との本読みや撮影途中での編集を中心にその都度内容を修正していった。実は処女作が全編無音と台詞なしのフィクション作品という過去を持つ私にとって、会話劇が苦手な傾向にあった。しかし今回、出演者と一緒に本読みを何度もするにつれ同じ台詞でも間やテンポ、微妙な感情の持ち方によって伝わり方が大きく変わってくる感覚を得て、会話劇の醍醐味を初めて味わせてくれた。この作品に対して真摯に向かい合った出演者たちに感謝を申し上げたい。またスタッフや出演者、一人たりとも欠けては成し得なかった作品に関われたことを喜ばしく思う。ただ、技術面で数多くの課題も見つかったのも事実だ。通訳の関係でマジョリティが主導する映画現場にマジョリティのろう当事者が入ることがなかなか難しい今、撮影や照明、編集等の技術を学ぶ機会を増やしていく必要性を強く感じた日々である。(牧原依里)

撮影中の様子

FILM

今井ミカ監督作品『お葬式！』 Production

Director: **今井 ミカ** Mika Imai

NPO 法人シュアール理事長・JSLTIME代表。2016年、日本手話による映像・映画制作グループ「JSLTIME」をろう者2人と設立。2019年、第27回レインボー・リール東京〜東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭や香港レズビアン＆ゲイ映画祭にて上映された、ろう者× LGBTQ の物語を描いた長編映画『虹色の朝が来るまで』劇場公開。他、第2回アイルランド国際ろう映画祭で最優秀賞を受賞した『あだなゲーム』(2014) 等、数多くの作品を制作。

映画情報：『お葬式！』フィクション／20分／2020年／日本／日本手話／カラー／音響あり
出　　演：今井彰人・野﨑誠・竹村祐樹・野口祐里・池上恵・森川純子・むろいち蘭・山岡希美子・岡林愛ほか
スタッフ：[監督・脚本・編集] 今井ミカ　[助監督] 牧原依里　[撮影] 大橋光　[撮影アシスタント] 棚橋瑛梨　[制作] 有澤智子
[編集アシスタント] 中川恵美
あらすじ：最愛の妻･佐藤愛(ろう者)が30代の若さで急死。佐藤愛の突然の死を悲しむお葬式のはずだったが､夫の佐藤健一(ろう者)は妻のためにとんでもない行動を起こす…。ろう者コミュニティの視点から描く、愛と笑いと涙で描くコメディドラマ。

『お葬式！』より

今回、このプロジェクトを通して異文化をテーマにしたろう者のお葬式を描くべく、撮影に向けてスタッフとともに準備してきた。そこで感じた気づきと発見を述べたいと思う。この「お葬式！」の大きなチャレンジは、最初から最後までカットせず、カメラ一つでワンシーンを撮影することだった。しかし、そのためにはスタビライザーが必要になる。その機材の取り扱いが不慣れな状況で全ての視覚言語（特に手話の台詞）が画角内に入るようにコントロールする難しさがあった。また、画角や動きをどのように撮影していくか、タイミングも兼ねて視覚言語を逃さないように細かくカメラの位置や動きなど一つひとつ細かく決めていかないと失敗してしまう。監督とカメラマンの他、スタッフや出演者など全員と情報共有をすることが成功のキーポイントであり、情報共有が一つでも欠けると完成できないことを改めて認識した。

また、今回の作品には、手話が少しだけわかる聴者の出演者もいた。最初はその聴者たちと情報を共有するために筆談や簡単な手話で意思疎通を行ったが、実際には効率があまり良くなく、情報の共有が難しいことがよく分かった。ろう者と聴者、言語がそれぞれ異なる大人数の中では言語を統一しなければいけないこと、今回は手話を言語とする私が監督であることから、聴者のための手話通訳を手配する配慮が必要だと気づき、重要な課題となった。次回からは情報共有のために通訳者を配置するなど工夫を凝らすことでその場にいる人たちのストレスを減らせるよう、改善していきたい。出演者・スタッフのポテンシャルを最大限に発揮できる環境下でより満足度の高い作品を作りたいと改めて感じた。（今井ミカ）

演技指導の様子

育成 手話 芸術
Training / Sign language / Art

総括 2019年度の活動を振り返って Review

小池 紀子
トット基金事務局長

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、障害を持つアーティストたちが発信するアーツ（舞台芸術、美術など）に対する関心がにわかに高まり、アーティストをとりまく環境も大きく変わろうとしている。関係省庁による支援のもと、当事者たちはそれぞれに適した支援を選び、自ら立案した企画を、より多くの一般のアーティストの共感を得て実現することができるようになった。「障害は個性」という考えが社会に浸透しつつあり、障害をマイナスではなくプラスの特性として捉える「ポジティブチェンジ」が進行しつつある。

2003年に国連が「障害者権利条約」を批准した際のスローガンは「No decision without us ～私たち抜きに私たちのことを決めないで～」だった。一見当然のことに思えるこのスローガンは、しかし思いのほか実現が難しい。「障害者芸術活動支援」において、支援を一過性のものではなく「レガシー」として継承していくため、この機に何をすべきか、それがこの事業の課題でもある。その根底には常に国連のスローガンがなければならない。

演劇、美術、映画各分野においてこの事業で今年度取り組んだ課題は、概して次のようになる。

演劇分野：他分野に先駆けて1980年から活発な活動を続けてきた演劇分野では、試行錯誤をしながらも手話や視覚に重点を置いたろう者独自の演劇作品がキラ星のように創出され、数々の賞を受け、多くの演劇関係者の注目を浴びてきた。その成果を土台に次なるステップへ進むべく、現代を代表する演出家の小野寺修二氏とのコラボ公演に取り組んでいる。将来国際芸術祭を立ち上げる際には中核となる作品の完成を目指し、今年度はワークショップを重ねて新しい演劇表現の可能性を探ってきた。7月に実施した仏クランドイユ芸術祭の視察は、国際的な水準と演劇界での立ち位置を知るうえで大きな成果があった。また「演劇メソッド研究会」においては、演劇の道を切り拓いてきたリーダーたちが一堂に会し、独自の表現をメソッド化するべく討議を重ねている。

美術分野：ろう者のアートを障害という視点ではなく、社会の中での立ち位置と、そこから生まれる新しい芸術として捉える先駆的なアーティストによって、この事業の美術分野がけん引されたことは幸せなことだった。東京藝術大学美術学部の荒木夏実准教授は、これまで出会ってきた数々の作品やアーティストのネットワークを惜しみなくろう者たちと分かち合い、同じ土俵に立って原点からアートを見つめていく、一連のワークショップを展開してくれた。（アートを通して考える 全6回）東京都美術館や東京藝術大学の協力も得、各ワークショップで登壇した講師たちは阿（おもね）ることなくろう者と活発なコミュニケーションを交わし、参加者たちはろう者、聴者を問わず、誰もが異文化交流を楽しんだ。

映画分野：映画分野では、すでに2回の開催実績がある「東京ろう映画祭実行委員会」を中心に、「育成×手話×芸術」のサブタイトルのもと、育成事業として本事業を展開している。昨年は第一線の映画作家等を招いてワークショップを実施したが、第二回東京国際ろう映画祭開催の折、自国の応募作品が少なかったことから、今年度はシナリオ作成から編集に至るまで、すべてをろう者の視点で創造する作品制作に取り組んでいる。また演劇・美術・映画部門が合同で実施した視察において、国際間のネットワーク形成や異文化交流につとめ、芸術祭創設への布石とした。

本事業において、有形無形のたくさんの成果があったことは各報告にある通りである。各年の成果の積み重ねにより、事業は着実に中長期的目標「ろう者を中心とした国際芸術祭の開催」に進んでいる。開催場所と資金調達の課題は大きいが、来年度以降さらにネットワークを広げ、早計に陥らず、しかし機を見て、継続可能なフェスの創設を目指したい。本事業を通じ、多忙な中多大な時間を割き、お力添えくださった方々に、一同、心から感謝申し上げたい。

事 業 名
令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）
国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2019

主　　催
文化庁 / 社会福祉法人トット基金

制　　作
社会福祉法人トット基金

協　　力
日本ろう者劇団 / 東京ろう映画祭実行委員会 / 東京藝術大学 / カンパニーデラシネラ /
特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク /Festival Clin d'Oeil /
アーツサポ東京

国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2019
育成×手話×芸術プロジェクト 報告書

2020 年 5 月 31 日　発行

発　　行　社会福祉法人トット基金
〒 141-0033 東京都品川区西品川 2-2-16
TEL：03-3779-0233　FAX：03-3779-0206
執　　筆　江副悟史 / 牧原依里 / 廣川麻子 / 木下知威 / 管野奈津美
荒木夏実 / 小野寺修二 / 藤田桃子 / 森岡見帆 / 小池紀子
編　　集　米津いつか
デ ザ イ ン　管野奈津美
写 真 提 供　江副悟史 / 牧原依里

※本報告書をご覧くださった皆様のご感想、ご意見をお待ちしています。
ご連絡は、育成×手話×芸術プロジェクト事務局 townofsl2020@gmail.com まで

© 2020 社会福祉法人トット基金
本書の無断複写・複製・引用を禁じます。